ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第141号

令和２年度における京都府内の埋蔵文化財調査 ---------- 肥後弘幸 ------ 1
綴喜郡井手町栢ノ木遺跡第13次調査－井手寺塔跡の発見－ ---------- 福山博章 ------ 9
研究ノート　横穴式石室導入前後の須恵器高杯に関する一考察 ---------- 野島悠之 ------18
初出考古資料「司馬温公甕割」伏見人形とその周辺――加藤雄太・小池　寛 ------30
令和３年度発掘調査略報 ----------38
１．下水主遺跡第12次
２．金生寺遺跡第９次
３．長岡京跡（右京第1233・1241次）・開田遺跡
４．菖蒲谷口遺跡第２次
長岡京跡調査だより・137----------43
現地公開（令和３年８月～令和３年11月）----------45
普及啓発事業（令和３年８月～令和３年11月）----------46
センターの動向（令和３年８月～令和３年11月）----------50

2021年12月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

井手寺塔跡（北西から望む）

綴喜郡井手町栢ノ木遺跡第 13 次調査

井手寺塔跡（北から）

調査地と井手寺跡（東から）

令和２年度における京都府内の埋蔵文化財調査

肥 後 弘 幸

１．はじめに

令和２年度に当調査研究センターが実施した発掘調査は、事業件数18件（整理報告３件を含む）で、調査か所は、府内22か所である。事業としては、新名神高速道路整備事業と国営農地整備事業を中心に、高規格道路や国道事業及び府道事業等の道路建設関係が大きな割合を占めている。加えて京丹後市で実施している山陰近畿自動車道（大宮峰山道路）に伴う発掘調査が本格化した。整理作業は、平安京跡、美濃山遺跡、満願寺跡などを実施しているが、この内、満願寺跡などについては報告集１冊を刊行している。

府内市町村の発掘調査は、新型コロナウイルスの流行によりやや鈍化しているが、京都市内を中心に発掘調査は実施され成果が上がっている。

以下では、令和２年度に府内で実施された発掘調査成果について、当調査研究センターの事業を中心に概観することとしたい。

２．各時代の調査成果

（１）旧石器・縄文時代

令和元年度の試掘調査で旧石器時代遺跡の存在が明らかになった福知山市稚児野遺跡で本格的な調査（当調査研究センター）が実施され、姶良丹沢火山灰層の下からおよそ36,000年前と考えられる後期旧石器時代前半の石器およそ800点が出土した。遺跡は、福知山盆地から８kmほど兵庫

稚児野遺跡調査状況

県側に遡った標高104mの台地上に位置する。出土した石器には、サヌカイト、チャート、頁岩、黒曜石などの石材を用いたナイフ形石器、掻器、刃部磨製石斧などか含まれる。令和元年度に当調査研究センターが調査した同時代とされる京丹後市上野遺跡の台形石器を含む石器群とは様相が大きく異なり、注目される。両遺跡の調査成果から京都府北部の旧石器時代の様相を垣間見れたことは大きな成果である。一方、京都府南部は、従来から京都盆地及びその周辺の台地上から３～２万年前の国府型ナイフ形石器の出土が知られているが、令和２年度は、長岡京市開田遺跡の調査(長岡京市埋蔵文化財センター)でナイフ形石器１点が出土している。

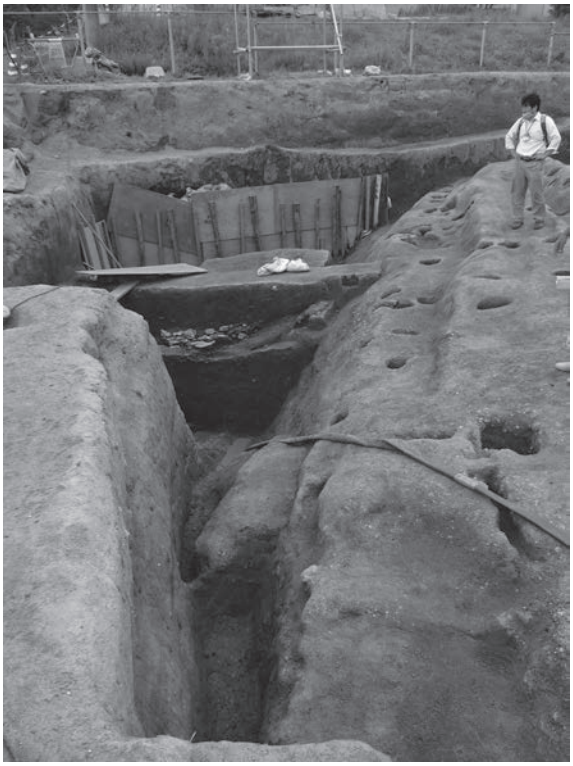
低丘陵の先端部に位置する京丹後市新町遺跡(当調査研究センター)では、縄文時代早期の条痕文系深鉢を埋設した土坑が検出された。周囲からは早期後半の押形文土器や後期の磨消文土器、磨製石斧、石鏃、勾玉なども出土している。

長岡京跡左京に位置する向日市森本町の調査(向日市教育委員会)では、流路内から少量の晩期の縄文土器とともに石冠が出土した。長岡京市伊賀寺遺跡でも過去の調査で石冠が出土しており、ともに赤色顔料が付着している。長岡京市伊賀寺遺跡でも発掘調査(長岡京市埋蔵文化財センター)が継続しており、中期末から後期にかけての土器が出土している。

前年度に縄文時代晩期の水辺に設置された木組み遺構や木道を検出した水主神社東遺跡の東に位置する小樋尻遺跡の調査(当調査研究センター)でも北白川上層式にあたる後期の包含層を確認している。

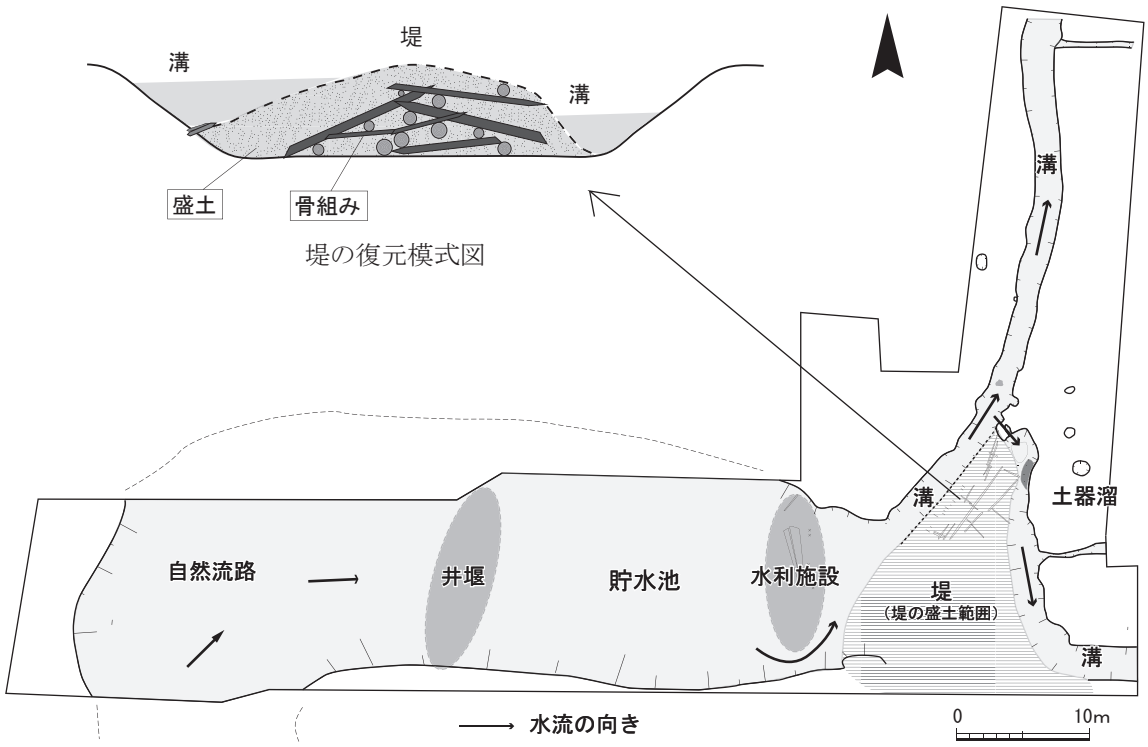
（２）弥生時代

丹後地域を代表する中期後半の環濠集落である与謝野町日吉ヶ丘遺跡(与謝野町教育委員会)では、遺跡の北西部で環濠の調査が実施された。方形貼石墓や竪穴住居などが検出された西部地区(国史跡)の環濠と較べ、丘陵側に位置するためか環濠は幅広で深い。幅は３ｍを測り、環濠内の内側からは深さ2.2mを測る。環濠は中期後葉には埋め立てられていたようで、環濠内から数層に渡る焼土層が見つかっている。環濠の内側には柵列が巡らされ、深い環濠とともに防御性が高い。環濠内からは弥生土器とともに多くの石製品、ヒスイ勾玉、緑色凝灰岩原石、石鋸、管玉未成品、各種石斧、磨石、叩き石、ドリル状石製品などが出土した。平成11～14年度調査の西側とは異なり、鉄生産にかかる資料は出土していない。



日吉ヶ丘遺跡の環濠

向日市森本町(向日市教育委員会)では、弥生時代中期の溝と方形周溝墓および弥生時代後



金生寺遺跡で見つかった古墳時代の水利施設

金生寺遺跡堤部の木組み遺構

期の方形周溝墓が検出された。後期の方形周溝墓は連接して２基以上あるようで、１基は一辺14ｍを測る大型のものであった。

（３）古墳時代

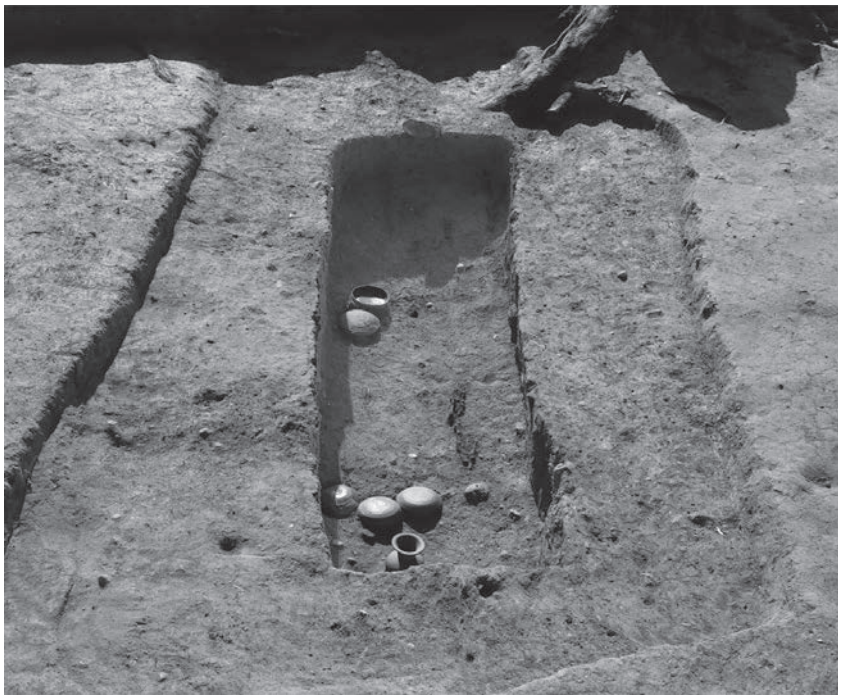
亀岡市金生寺遺跡（当調査研究センター）では、４世紀から５世紀前半にかけて使用された小川の中に築かれた水利施設が検出された。縦横交互に組み合わせて骨組みを作り、その隙間に砂利や粘土を入れて構築された大きな堤があり、その手前に井堰を築いて貯水池を作り、そこから水利施設を使って導水する灌漑施設である（上図）。４世紀初めに築かれ何度か改修を受けながら５世紀前半まで利用され続けたようである。水利施設から派生する支流水路の分岐点では壺・甕・

小樋尻遺跡の導水施設

小型丸底壺・高杯などの土器が完形で多く出土し水辺の祭祀が行われていたと思われる。

城陽市小樋尻遺跡（当調査研究センター）では古墳時代前期に埋没した幅25m・深さ2.7mの自然流路が見つかり、中から木樋と堰板で構成された導水施設が検出された。また、流路内からは鋤・鍬などの木製農具や数多くの土器とともに漆塗りの盾や琴などの木製品や勾玉が出土した。この自然流路が埋没した後、古墳時代後期に幅約11m、深さ約1.8mの規模で溝として再掘削されていた。溝の両側には敷葉工法で堤が造成されていた。奈良時代に至るまで数度にわたり、再掘削されたようで、奈良時代の層からは祭祀に関係する木製品の斎串と人形が出土している。調査地にあたる宇治丘陵の西部は古代に「栗隈」と呼ばれていた地域で、『日本書紀』に記す仁徳朝や推古朝の「栗隈の大溝」との関係が問われるものである。

調査が継続している城陽市芝山古墳群の調査（当調査研究センター）では、８基の古墳が調査された。前期から中期にかけての古墳からは方格規矩八禽鏡が、墳丘の削平された中期の２古墳から蛇行剣２振りや鉄鏃が、後期に営まれた組合せ式木棺からは、須恵器の壺、蓋杯、鉄鏃、刀子



芝山古墳群内の組合せ式木棺

法貴峠20号墳

などが出土した。福知山市池ノ谷１号墳の調査（福知山市教育委員会）では、直径22mの円墳から木棺２基が検出され、鉄刀・鉄鏃などが出土した。亀岡市法貴峠古墳群では古墳群の存在する丘陵の先端部で横穴式石室からなる20号墳の存在が明らかになり、当調査研究センターが調査を実施した。直径約13mの円墳で玄室長3.1m、玄室幅1.9mを測る両袖式の石室と墳丘内列石が確認された。石室内は盗掘により荒らされていたものの水晶やガラスの玉類や須恵器などが出土した。

（４）古代

京都市上御霊遺跡（株式会社文化財サービス）では、白鳳期の７世紀後半の竪穴住居９棟、掘立柱建物４棟が検出された。

京都市北白川廃寺（京都市）では、２か所の地点で発掘調査が実施され、それぞれ、飛鳥時代の溝、奈良時代の溝・土坑などが検出された。

向日市宝菩提廃寺（向日市埋蔵文化財調査センター）では、新たに創建時の瓦窯跡に伴う灰原が調査され、白鳳期の単弁八葉蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、四つの蓮華文を配置した鬼瓦、唐草文を持つ塼などを含む多量の瓦が出土した。宝菩提院廃寺は2003年の調査で大型の竈と石敷き施設などからなる平安時代前期の湯屋遺構がみつかっている。近年の研究では、長岡京内の有力寺院であった長岡寺ではないかとの意見も出ている。

井手町栢ノ木遺跡の調査（当調査研究センター）では四至の明らかになった橘諸兄創建の井手寺跡の東側から一辺15.3mを測る乱石積み基壇が見つかった。北辺と東辺の構造が明らかになり、その中央に石の階段が設置されていた。その位置及び構造から伽藍の外に配置された塔院内の五重塔の基壇と考えられる。奈良時代の瓦に加えて平安時代前期の瓦が相当量含まれており、富寿神宝（818年初鋳）が地鎮に使われていたことなどから嵯峨天皇の皇后となった橘嘉智子の時代に

井手寺塔跡

完成したと考えられる。

恭仁宮跡第101次調査（京都府教育委員会）では、朝堂院区画の南東隅部の柱穴が確認され、朝堂院区画の範囲が東西約117.3m、南北98.8mであることが明確となった。

向日市長岡宮第621次調査（向日市埋蔵文化財センター）では、一条条間北小路の両側溝と東一坊坊間西小路の東西両側溝が検出され、宮内道路の敷衍状況が明らかになった。

向日市長岡京左京621次調査ほか（向日市教育委員会）では北一条大路両側溝、東二坊坊間東小路両側溝などの条坊側溝が検出された。北一条大路の路面幅は24m、東二坊坊間小路の路面幅は9.5mである。北一条大路両側溝の外側からは宅地内の内溝が検出されている。なお、北一条大路南側溝の北側（北一条大路の路面位置）からは南北２間・東西７間の大型の掘立柱建物が検出されているが、側溝との前後関係は不明である。調査区の北東側を流れる流路内からは「神明膏」と墨書された土器や多くの墨書人面土器、「□暦四年」銘墨書のある木簡などが出土した。

長岡京市右京第1205次・開田遺跡の発掘調査（長岡京市埋蔵文化財センター）では、五条大路の北側溝と平安時代中期から後期の掘立柱建物群が検出され、柱穴内から緑釉陶器や瓦が出土した。瓦には仁和寺出土と同型のものがあり、宇多天皇が創建した仁和寺の院家「開田院」の存在がうかがわれる。文献には建久９年（1198）年10月、後鳥羽上皇、西山開田院に行幸するなどの記載がある。

長岡京市右京1219・1220次調査（長岡京市埋蔵文化財センター）では二条大路北側溝や西二坊坊間西小路両側溝などが検出され、飾り板付きの銅鈴などが出土した。右京1232次調査（同前）では、一辺1.5m以上の方形掘形を持つ建物が見つかり、周辺部の調査成果も加えて右京六条三坊三・四町からなる東西２町規模の宅地の内容が明らかになりつつある。

史跡西寺跡(38次)・唐橋遺跡の調査(京都市文化財保護課)は、西僧房推定位置において実施された。西僧房は、過去の調査成果から東西16.5m、南北97.28mの長い建物であったと推定されている。今回の調査地では全域から非常に固く締まった丁寧な整地土を確認し、推定どおりの西僧房の存在を明らかにした。なお、史跡西寺跡については昨年度までの範囲確認調査の内容をとりまとめた報告書が刊行された。

二条駅西側で度重なる発掘調査が行われている平安時代前期の右大臣藤原良相邸(百花亭)の発掘調査(京都市埋蔵文化財研究所)では、２町四方の宅地の西側の園地が東西43m、南北27m以上の範囲で見つかり曲線を描く州浜の様子が明らかになった。

平安京右京六条二坊十二町跡(京都市埋蔵文化財研究所)では、平安時代前期の西堀川の流路遺構、井戸１基が検出された。 西堀川は、過去の調査からも洪水と闘いながらその機能を維持しつづけようとするが、10世紀には放棄されることがわかっており、今回の調査でもあらためてそのことが実証された。当該地は素掘り溝にみられるように、鎌倉時代後期には集落が失われ農地化していく。

（５）中世

平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡の発掘調査では、平安時代後期の流路跡がみつかったほか、鎌倉時代前半期の柵・溝など区画に関する遺構、井戸・土坑・柱穴など住居に伴う遺構を検出した。遺物は土師器、東播系須恵器、瓦器などが中心であるが、吉州窯産天目茶碗、青白磁托という高級輸入陶器も含まれている。

前年度発掘調査され、平安後期から室町時代にかけての３時期の建物跡を確認した舞鶴市満願寺跡の調査では、国産の土師器や陶器などとともに中国製の陶磁器が多く出土し注目された。整理作業を進める中で、平安時代末から鎌倉時代初頭に中国北部の河北省にある磁州窯で作られた「国釉白堆線文壺」が出土していることが明らかになった。

八幡市今里遺跡(八幡市教育委員会)では、この数年鎌倉時代から江戸時代にかけての墓地が調査されていたが報告書が刊行され、土葬と火葬を行う墓地の変遷があきらかになった。

８代将軍足利義政が改修したとされる室町殿（花の御所）の庭園の一部が調査（京都市埋蔵文化財研究所）され、巨石を景石として配し、巨大な石材からなる石組の滝を構築していた様子が明らかになった。

巨椋池北岸に位置する富ノ森城の調査(京都市埋蔵文化財研究所)が実施された。微高地に形成された中世の環濠集落内に立地する城館跡である。鎌倉時代後半から室町時代の建物・区画溝・墓などが見つかった。

足利義昭の居城旧二条城(京都市埋蔵文化財研究所)については、地下鉄烏丸線の調査に伴い内郭北濠に伴うと推定される石垣が検出されていたが、40年ぶりにその西側100mほどの地点から濠跡が検出され、線的に北濠の様相が明らかになった。周辺の調査成果と合わせ、旧二条城跡は京都の街中に造られた平城で、内郭の北濠は石垣を持ち、幅14m・深さ３mの堂々たる箱掘りの水堀であることが明らかになった。

長岡宮第535次調査（向日市埋蔵文化財センター）では15世紀から16世紀の遺物を含む堀状遺構が検出された。文献に登場するものの所在の不明な「寺戸城」との関連が問われる。

京都市により範囲確認調査が続く山科本願寺跡では、御影堂の推定地の調査が実施されたが、井戸・土坑を検出したのみで建物に伴う遺構は検出されなかった。

京都市右京区京北町にある周山城は、明智光秀の築城と伝え、天正９年（1581）年には築城されていたことが明らかになっている。京都市による測量調査が継続実施され、赤色立体図による広大な城の様子が明らかにされている。今年度は石垣の測量調査が実施された。このほか京都市による５年目の指月城・伏見城跡の範囲確認調査が実施されたが特筆すべき成果はない。

豊臣秀吉が最晩年に築いた京都新城の石垣と堀が京都仙洞御所の下層から発見された（京都市埋蔵文化財研究所）。京都新城に伴う遺構としては初めての発見である。石垣は大きな石材を４段以上積んでおり、京都新城の西堀の一部と推定される。五七桐文や菊花文などの金箔瓦が出土している。

（６）近世

西国三十三か所観音霊場の一つ、舞鶴市松尾寺の山門（府指定文化財）の解体修理に伴う発掘調査（舞鶴市文化振興課）では、現在の山門の下から場所を少しずつずらしながらも山門が建て替えられていた様相が明らかになった。また、出土遺物からこの寺院が平安時代前期に遡る可能性が高くなった。前回の江戸後期の再建にあたっての地鎮具が発見された。地鎮に用いられていたのは、元禄二朱板金、元禄豆板銀、寛永通宝12枚、そして土師器小皿２枚であった。

新型コロナウイルス感染防止の観点から、各種機関の講演会活動や、博物館・資料館での埋蔵文化財に関する展示は盛んといえなかったが、当調査研究センターが実施した設立40周年を記念した戦国期～江戸時代をとりあげた「動乱の世から太平の世へ」、向日市埋蔵文化財センターが五塚原古墳の現地調査終了を記念して行った「乙訓古墳群出現前夜－五塚原古墳誕生への道－」など精力的な展示も行われた。

（ひご・ひろゆき＝当調査研究センター事務局次長）

綴喜郡井手町栢ノ木遺跡第13次調査
―井手寺塔跡の発見―

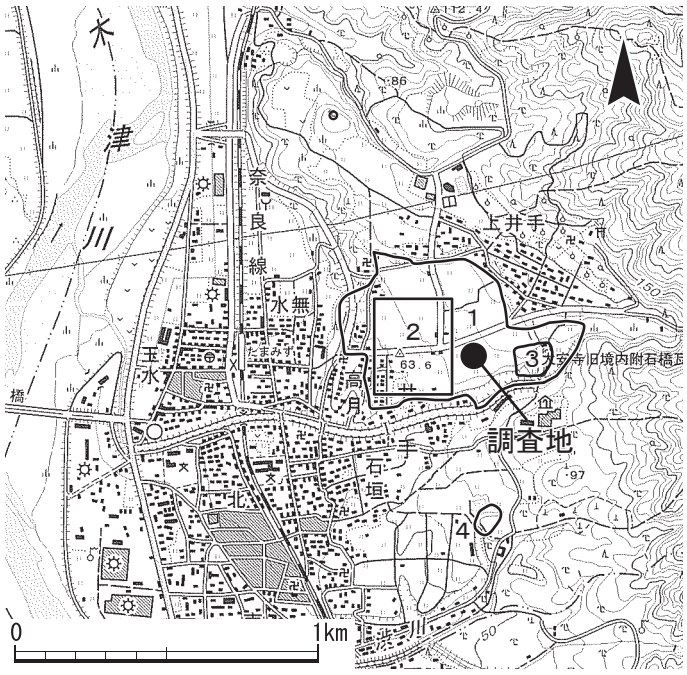
福 山 博 章

１．はじめに

栢ノ木遺跡は、奈良時代の集落跡とされ、綴喜郡井手町の西部、木津川の支流である玉川右岸の段丘上に立地している。周辺には、井手寺の瓦を製作した岡田池瓦窯跡や、大安寺の創建に際して瓦を製作した「棚倉瓦屋」に比定される石橋瓦窯跡群（史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡）など、奈良時代の瓦窯跡が分布している（第１図）。また、『続日本紀』に記載される橘諸兄の別荘である「相楽別業」や聖武天皇が行幸の際に滞在した「玉井頓宮」もこの地域にあったと推定されており、奈良時代の首都である平城京と関連の深い地域であったと考えられる。

調査地は、綴喜郡井手町大字井手小字東高月に所在し、遺跡範囲の中央部に位置し、奈良時代から平安時代にかけて存続した井手寺跡(注1)の寺域東限に隣接する。調査地の付近一帯には、台地の傾斜に沿った棚田の景観が広がる。

今回の調査は、井手町新庁舎等整備事業に伴い、井手町の依頼を受けて令和２年12月21日から令和３年５月28日まで実施した。



１．栢ノ木遺跡　２．井手寺跡　３．石橋瓦窯跡群　４．岡田池瓦窯跡

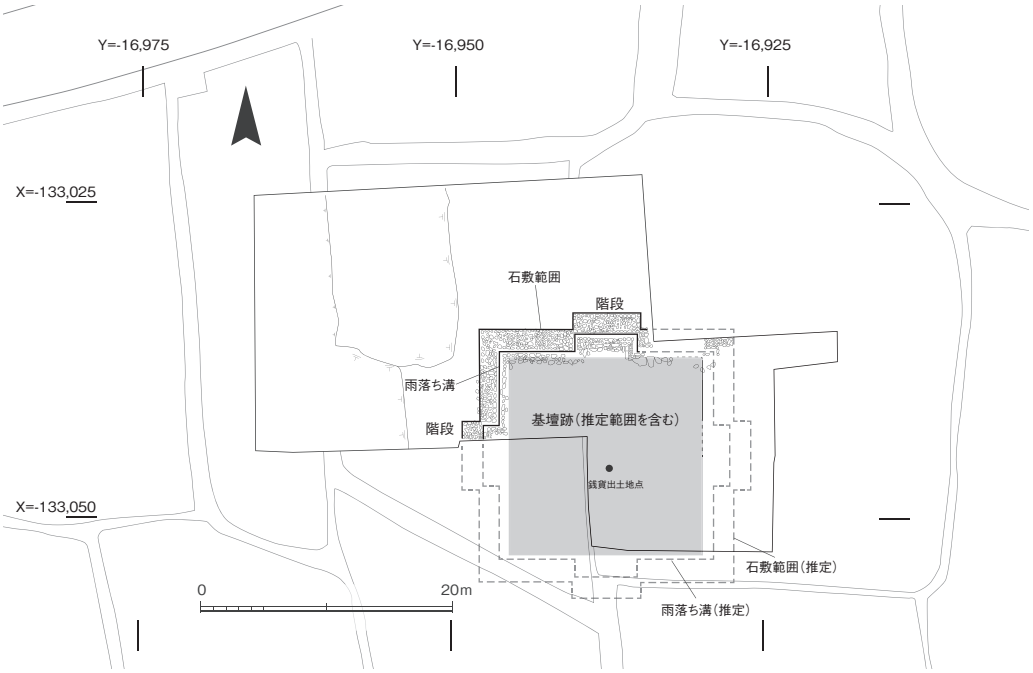
第１図　調査地と周辺の主な遺跡（１／25,000）

２．検出遺構

今回の調査は、井手町教育委員会の試掘調査の結果により、本発掘調査が必要と判断された範囲である500㎡の調査を行った。その結果、調査区東南部で建物基壇と基壇に伴う階段、基壇外周の犬走り、雨落ち溝、石敷などを確認した。基壇の復元の結果、塔の基壇と基壇外周の北側と西側の一部であることが判明した（巻頭写真及び写真１）。

（１）基壇土

棚田の造成により削平された基壇内部の段差で、基壇土を観察することができた。基壇内部は、質の異なる土が交互に積み重ねられており、



第２図　調査区平面図

基壇は版築による盛り土によって築成されたと判断される。基壇土の断面で礫を確認したほか、基壇内部の平面から多数の礫を検出したことから、大小の礫を版築に混ぜ込んだと考えられる。版築による盛り土は、基壇中央部分に向けて盛り上がっている。

（２）基壇外装および上面

基壇外装は基壇北東側しか残存していなかったが、基壇外周の北側と西側では、犬走りの石列を２列検出した。東側では瓦の堆積層が直線的に途切れる部分で土層の変化を確認した。また、南側は棚田の段差となっており、基壇による段差を一部踏襲していると考えられる（第２図）。

このような検出状況から、基壇の平面形は、ほぼ正方形に復元され、東西約15.3m、南北約15.1m、残存高0.7mを測る。

基壇外装は自然石や一部加工した石を用いた乱石積基壇である。使用された石材は風化が進んでいるが、被熱した痕跡はない。外装は削平のため、基壇北東側で最下段の１段分しか残っていなかったが、幅0.65m、厚さ0.83m、高さ0.7mの大型の石材が用いられていた。外装が残存していた部分では、基壇内側で裏込め土を検出した。後述する階段の形状からも、基壇外装には、本来１石もしくは２石が積み重なっていたと考えられる。

基壇上面は、後世の開墾等によって削平され、石材が抜き取られており、礎石などは確認できなかった。階段耳石の延長線上付近から、礎石の根石となる可能性がある石材を検出したが、礎石据え付け穴および、抜き取り穴を検出できなかったことや、周辺では版築に用いられた石材が散乱していたため、判然としない。また、基壇上面の舗装に関しても不明である。

このように、基壇上面は、大規模な削平を受けていたが、基壇上面のほぼ中央で銭貨が散乱した状態で17枚出土した。銭貨は出土時には劣化が著しく、肉眼による判読ができなかったため、

写真１　塔跡垂直写真（上が南）

Ｘ線ＣＴによる観察を行った結果、７枚が弘仁９（818）年初鋳の「富壽神宝」であると判明した。[注2] これらの銭貨は鎮壇具の可能性が高い。

（３）基壇地覆

基壇北西側では、基壇盛り土に埋め込まれた石列を検出した。石列は１列で、犬走りと雨落ち溝に並行している。雨落ち溝や石敷などに用いられた石材よりも、大型の凹凸のある石材を用いている。石列は基壇北西隅で逆Ｌ字形に並べられていたが、基壇西側では検出できず、南北方向に瓦片が混じる土層の変化を検出したため、抜き取られたと考えられる。この石列は、基壇外装の石材が積まれる位置に当たるため、地覆石であると考えられる。

（４）基壇階段

階段は基壇の北辺と西辺の２か所で検出した。階段も基壇外装と同様に乱石積で構築されていた。北辺では、階段の羽目石と耳石のほか、踏石４段を検出した。階段は、幅2.6m（９尺）、残存長1.6m、残存高0.5mを測る（写真２）。

羽目石は東西ともに１石が残存していたが、西側の石が高いため、東側は少なくともさらに１石が積まれていたと推定できる。

耳石は、東側で３石を検出した。西側は抜き取られており、１石しか残存していなかった。全て縦長であるが、いずれも幅が異なる石材である。このように、階段に用いられた羽目石と耳石は、使用した石材の大きさと形態が階段の左右で異なる。

階段南側の基壇側からは、裏込め土を検出した。裏込め土は版築と異なる土で充填されており、裏込め土の中からは、礫とともに、平安時代前期の軒丸瓦と平瓦が出土した。

基壇西辺の階段は削平されており、地覆と基底の石材のみが残存していた。

写真２　北辺階段付近の状況（北から）

（５）基壇外周

調査区北側と西側の基壇周囲からは、地山の上層で整地層を検出した。整地層は調査区北東側から南西にかけて削平を受けていたほか、西側では棚田の段差となっていたため、整地土の範囲は不明である。地山には大小の礫が混じるほか、土石流による巨礫を局所的に含み、遺物は出土しない。整地層では礫をほとんど含まないが、平・丸瓦と黒色土器が出土した。整地層は砂混じりの粘質土の単層であり、地山と同一の土色・土質であるため、地山由来の整地土であると判断できる。整地層は基壇北側と西側では厚さが異なっており、台地上の緩やかな傾斜を平坦に造成するため、客土による整地を行ったと考えられる。

犬走りは、基壇外装の外側で２列を確認した。犬走りの出は、基壇外装から２石分となる。基壇北側では良好に残存していたが、基壇西側では基壇側の石列が抜き取られており、３石のみが残存していた。

雨落ち溝は「乱石組」であり、犬走りと石敷の間に位置する。石敷の基壇側１石分および、犬走りの外側１石分の石列は雨落ち溝の側石となる。側石は幅の広い石を用いており、溝内側で面を揃えて並べられている。雨落ち溝は、幅0.4～0.45m、深さ0.11～0.44mを測る。溝幅はほぼ同じであるが、深さが異なるのは、溝両側で側石の高さが異なるためであり、犬走り側に大型の石材を用いている。溝底にも石を敷設しており、大型の石材１石を用いるほか、石材を２石もしくは３石並べて底石としている。また、石敷や犬走りと違い、溝底では石材の間に小石を敷設している箇所が目立つ。溝底に用いられた石材には敷設の規則性はない。雨落ち溝の内部からは、軒丸・平瓦を含む大量の瓦と土師器、灰釉陶器、鉄釘などが出土した。

写真３　主な出土品
（１．２　軒丸瓦、３-５　軒平瓦、６　金銅製風招、７-９　施釉垂木先瓦、10　鬼瓦　以上縮尺不同）

基壇外周の約1.5m幅の範囲には石敷が丁寧に構築されていた。石敷外周の側石は面を揃えて並べられており、その中に石材を敷設していた。北辺階段の中心線上には、石敷の中に１石だけ、縦長の石材が置かれており、石材敷設の基準とした可能性がある。石敷と雨落ち溝は、地形の傾斜と同様に、東側が高く、西側が低くなっている。石敷の直上からは、軒平・丸瓦、平・丸瓦のほか、灰釉陶器、鉄釘などが出土した。

３．出土遺物

今回調査を行った基壇の北側と西側では、多量の瓦をはじめとする遺物が出土したが、いずれも中・近世の土器や陶磁器とともに出土していることから、後世の棚田の開墾により再堆積した

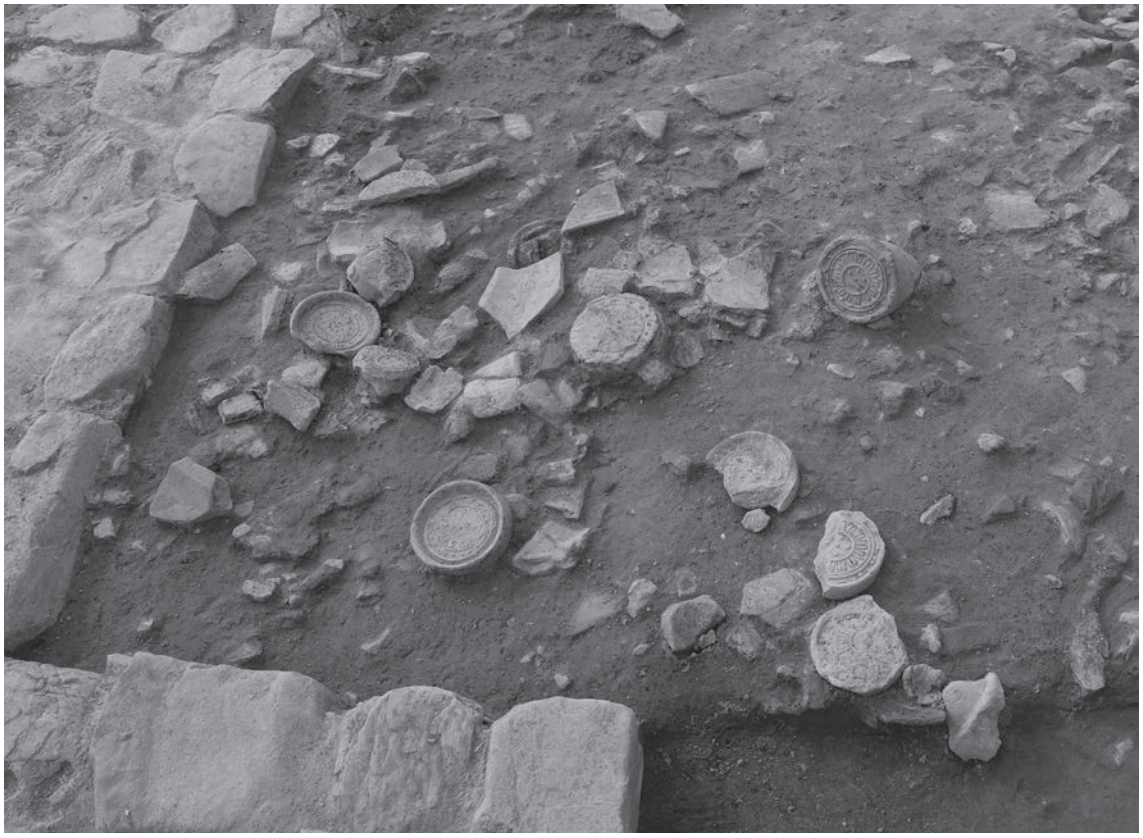


写真４　瓦出土状況（東から）

と考えられる。また、施釉垂木先瓦、奈良三彩も瓦の再堆積層から出土しており、細片となっている。このように、今回の出土遺物の大半は後世に二次的な移動を受けているが、井手寺の中心伽藍から東に離れた地点であり、周辺からは同時期の遺構が検出されていないことから、これらの遺物は今回検出された基壇建物で用いられた蓋然性が高い。また、基壇北側の削平を受けていない整地土直上付近から数多く出土した軒平・軒丸瓦を始めとする遺物及び石組の上面や雨落ち溝内部から出土した遺物は、塔の廃絶時の状態を留めていたと考えられる（写真４）。なお、出土遺物はコンテナ2700箱におよぶ。

井手寺の中心伽藍でも出土している施釉垂木先瓦（写真３　７～９）は、平面方形で中心と四隅に釘穴を５か所穿孔する。緑色と白色の２色の釉薬で色彩し、表面には花文様を線刻する。今回の調査では、これまで確認されていない花文様の線刻を施す施釉垂木先瓦も出土した。

出土した軒平･軒丸瓦は､奈良時代中頃（1～３）から平安時代中頃の瓦である。奈良時代の軒平･軒丸瓦の型式は、平城宮・京の分類による、6130Ａ型式（ＩＴM01）、6134c型式（ＩＴM03）、6320Ａ型式（ＩＴM02）、6691Ａ型式（ＩＴM51）などがあり、これまでに井手寺跡で出土している軒平・軒丸瓦と共通しているほか、平城宮、恭仁宮で同笵の瓦が確認されている[注3]。そのほかに、新型式の軒平・軒丸瓦も含まれる。

井手寺跡では、平安時代の瓦も出土していたが、いずれも細片のため、実態は不明であった。今回の調査でも平安時代の瓦の出土点数は全体的に数少ないが､注目されるのは､中心飾りに「栗」という字を刻印した軒平瓦（５）が１点出土しており、平安宮に瓦を供給した栗栖野瓦屋の製品と

第３図　井手寺寺域復元図及び今回の調査区

判断できる。また、複弁四葉一本作りの軒丸瓦が出土しており、瓦当面には「界」という字を刻印する。北野廃寺、平安宮朝堂院で同笵瓦が確認されている（平安博物館編1977、京都市埋蔵文化財研究所1996）。

大量の平・丸瓦の中には赤色顔料が付着する瓦や、「足男」、「刑部」と記された恭仁宮式文字瓦も含まれている。そのほか、鬼瓦（10）、隅木蓋瓦、塼などが出土している。(注４)

土器は少量であるが、て字状口縁を呈する土師器皿、糸切り底の須恵器壺、黒色土器椀、灰釉陶器の椀、皿、壺のほか、奈良三彩の壺と盤が出土している。灰釉陶器と奈良三彩はいずれも仏具として使用されたと考えられる。このように、出土した土器の大半は平安時代のものである。

金属製品は、400点以上の鉄釘のほか、扉の金具、鉄製の風鐸の舌、金銅製の風招（６）などが出土している。金属製品はいずれも融解しておらず、残存状態は良好である。このように、今回の調査では、古代寺院で用いられた多彩な遺物が出土した。

４．まとめ

今回の調査で見つかった基壇は、15.3m（51尺）四方のほぼ正方形に復元でき、北側と西側の２か所に階段が位置することから、塔の基壇跡と考えられる。塔基壇の規模を比較すると、現存する三重塔である薬師寺東塔基壇は一辺約13m、七重塔と推定される山城国分寺跡塔基壇は一辺が約17mであることから、五重塔基壇と想定される。

塔基壇は乱石積基壇であるが、基壇外装に大型の石材を使用することや、犬走りを造り出すな

どの特徴を有していることから、切石の壇上積基壇を模範とした乱石積基壇であると評価できる。

出土した瓦から、基壇は井手寺に伴う塔跡であると判断され、奈良時代後半から平安時代前期に建立されたと考えられる。これまでの発掘調査から、井手寺の創建は８世紀中頃と考えられているほか、寺容が整うのは平城還都後であるという指摘もある（中島2010・2017）。今回発見の塔は、出土瓦の年代と整地土から平・丸瓦が出土していることからも、主要伽藍の整備からやや遅れて建立され、平安時代中頃に修理が行われたと推測される。また、軒平・軒丸瓦の同笵関係から、奈良時代から平安時代にかけて、宮都と関連の深い寺院であったと推定される。

基壇周辺の瓦溜まりから出土した土器から、塔は鎌倉時代には廃絶したと考えられる。また、基壇に使用された石材や出土遺物、調査区の堆積層には被熱した痕跡はないため、塔は火災ではなく、老朽化に伴い倒壊したと判断される。

井手寺跡では水田の開墾に伴い、礎石や瓦が出土することから、古代寺院の存在が早くから知られていた。これまでの井手寺跡の発掘調査では、礎石建物６棟、掘立柱建物１棟、石組の雨落ち溝や石敷などが見つかっているほか、築地塀に伴うと考えられる雨落ち溝を確認しており、約241.2m（810尺）四方におよぶ広大な寺域が復元されているが、主要部での遺構の残りが悪いこともあり、伽藍配置については未解明であった。

今回の調査で発見された塔跡は、寺域推定地外から検出したことから、主要伽藍とは別の区画を設けて、寺域南東に塔院を形成していたと推定される（第３図）。

地方寺院において塔院を形成するのは稀な事例であり、塔院の区画を含めると、井手寺の寺域はさらに大規模なものであった可能性がある。このように、主要堂宇である塔の遺構を確認できたことは、井手寺の実態に迫る大きな成果である。

井手寺の造営氏族や創建時期などについては、同時期の文献史料に記載はない。これまで、井手寺は橘諸兄の創建と考えられていたが、井手寺についても記載される『興福寺官務牒疏』は偽文書であることが改めて明らかとなったため、再考を迫られている（馬部2020）。

井手寺と橘氏の関係を記載する史料は、平安時代末期の『伊呂波字類抄』のみであり、「末社一所　山城国井手寺内」と記載があり、井手寺に橘氏の氏神である梅宮神社の末社が祀られていることが記されている。また、『尊卑分脈』では橘諸兄を「井手左大臣」と号しており、橘氏公が「井手右大臣」と称されるなど、橘氏の氏長者には「井手」という通称が使われており、井手地域と強い結びつきがあったと考えられる。

井手寺跡の出土瓦はほとんどが奈良時代中頃以降のものであり、宮都と同笵の瓦を用いることから、中央政府と関連の深い氏族による創建が考えられ、瓦の年代からも、奈良時代中頃に政権の中枢を担った橘氏によって創建された蓋然性は高い。

橘氏は天武13（684）年に県犬養三千代が橘姓を賜ったことを始祖とし、橘諸兄は奈良時代中頃に左大臣となり政権の中枢を担った。その後、息子の橘奈良麻呂の乱により、橘氏は一旦、政権の中枢を退くが、弘仁６（815）年には、橘嘉智子が嵯峨天皇の皇后となり、橘氏の氏神である梅宮神社を現在の地に遷し、嵯峨野に壇林寺を造営した。嘉智子の弟の氏公も承和11（844）年には

右大臣に昇進する。このように、井手寺跡から、同時期の宮都と同笵の瓦が出土することや塔心礎推定位置から、「富壽神宝」が出土したことは、橘氏の隆盛と関連すると考えられる。

その後、源経頼の日記である『左経記』の万壽三（1026）年三月十三日条には、「帰洛之次過拝井手寺、破損殊甚、雨脚不障、仏像多湿損」と記されており、井手寺が荒廃した様子が分かる。

このように、井手寺の造営は、当時の橘氏の権勢を示す国家規模の一大事業であったと考えられ、今回の発掘調査は、古代における氏寺の実像を明らかにする重要な成果である。荘厳華麗に装飾された塔が、井手寺と橘氏の権力のシンボルとして高くそびえ立っており、橘氏の盛衰を物語っていたのだろう。

栢ノ木遺跡第13次調査は現在、報告書刊行に向けた整理作業中である。正式な報告は報告書の刊行をもって行う。

（ふくやま・ひろあき＝当調査研究センター調査課主任）

注１　井手寺跡の調査は大正 12（1992）年の梅原末治氏の報告に始まる（梅原 1923・1929）。発掘調査は、平成 13（2001）年に府道拡幅のための当調査研究センターの発掘調査により、初めて掘立柱建物が検出された（野島 2002）。その後、平成 15（2001）年から平成 23（2011）年にかけて、井手町教育委員会による発掘調査が実施され、礎石建物の検出、寺域の確定などが行われた（茨城編 2014）。

注２　銭貨のＸ線ＣＴ撮影には京都国立博物館学芸部保存科学室の降幡順子氏にご協力頂いた。

注３　奈良時代の瓦の型式および年代は、奈良国立文化財研究所編 1991、奈良国立文化財研究所 1996、茨城編 2014 に基づく。

注４　今回の調査を含む、井手寺跡出土瓦の分類整理に関しては、京都府立大学大学院溝口泰久氏、京都大学大学院吉岡孝紘氏にご協力頂いた。

参考文献

梅原末治 1923「井手寺址」『京都府史跡勝地調査會報告』第四冊

梅原末治 1929「山城綴喜郡井手寺の遺跡」『歴史と地理』11 巻４号

平安博物館編 1977『平安京古瓦図録』　雄山閣

奈良国立文化財研究所編 1991『平城宮発掘調査報告Ｘ III』奈良国立文化財研究所学報第 50 冊 奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所編 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所

京都市埋蔵文化財研究所編 1996『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所

野島永 2002「井手寺跡・栢ノ木遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 102 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

中島正 2010「井手寺」『南山城の古代寺院　同志社大学歴史資料館調査研究報告』第９集　同志社大学歴史資料館

茨木敏仁編 2014「井手寺跡発掘調査報告書―２～ 10 次（平成 15 ～ 23 年度）調査―」『京都府井手町文化財調査報告書』第 15 集　井手町教育委員会

中島正 2017『古代寺院造営の考古学―南山城における仏教の受容と展開―』同成社

馬部隆弘 2020『椿井文書―日本最大級の偽文書』中公新書 2584　中央公論新社

研究ノート

横穴式石室導入前後の須恵器高杯に関する一考察

野島悠之

１．はじめに

古墳を検討する際、出土した土器は、葬送儀礼の復元や年代的な位置づけにおいて大きな論拠となる。土器の中でも須恵器については、窯跡資料によって編年案が整理されてきた（森1958、田辺1966・1981、中村2001など）。つまり、古墳から出土した土器は出土位置や検出状況から使用方法が推定され、その形状については年代決定の手段として扱われやすい。

本稿では、土器の形状が消費地からの影響を受ける場合もあると考える。そのうえで、横穴式石室出現前後の須恵器の形状を出土位置と比較し、器形変化についての試案を提示してみたい。

２．先行研究の整理と問題の所在

（１）研究史の整理

研究史の中で、古墳時代の須恵器の形状は年代の差異や技術系統のほか、消費地や葬送儀礼にも規定されうるとも考えられてきた。例えば、田辺昭三はＭＴ15型式期の須恵器の長大化について、その背景を「葬祭供献用土器として急速に発達した結果生じた形態上の変化」（田辺1981 p.40）と評価している。また、巨勢山古墳群の須恵器のセット関係を検討した木許守は「これらの土器（＝セット関係を保つ土器：筆者注）が葬送の必要に応じて、古墳造営者によって一時に調達され入手から副葬までの時期が短かった」と考えた（木許2009 p.112）。これもあらかじめ葬儀用に分け置かれた個体の存在を示唆する指摘である。

ほかにも、佐藤隆は６世紀でも小型須恵器の器形が残るのは須恵器の大型化と横穴式石室の相関性が必ずしも整合しない、複雑な需要の在り方が背景にあると評価しており（佐藤2007 pp.40・41）、器形変化の背景をとらえるには、窯跡の検討に加えて、消費地にも目を向けることが求められるだろう。私はこうした先学の成果に導かれながら、消費地出土の土器の形状が時期差や系統の違いを示しつつも、同時に葬儀の内容を反映しうるとの立場をとる。

一方で、課題も残されている。古墳出土資料では、出土位置と組成の関係（寺前2012）や蓋と身のセット関係などに重きが置かれている。須恵器の形状それ自体は、古墳の年代を決めるための材料となりやすい。つまり、土器の形状は生産地資料を用いた編年の細分に、消費地の土器出土状況は土器組成と合わせて儀礼面へと、別個の視点として検討されてきた。今一度両者を照らし合わせることにより、儀礼の中の一側面を明らかにする余地が残されていると考える。

その中でも、脚付の器種はその有無が墳丘形態や副葬品に見られる古墳の階層性に最も対応するとの指摘がある（寺前2005 p.452）ほか、藤原学は高杯を含む脚台・頸部などを持つ器を「祭儀

に係る人間の意識の変化を微妙に測れる好適な資料」（藤原1991 p.124）と位置付けた。つまり、数ある須恵器の中でも特に消費地（古墳）を意識して製作された可能性も想定できる。本稿では、墳丘・周溝と横穴式石室の玄室内で良好な出土事例を残し、かつ資料数を確保しやすい須恵器高杯を対象とする。

（２）問題の所在

それでは、横穴式石室出現前後に対応する時期の高杯の形状について、研究史を整理したい。

森浩一は第二期の須恵器は第一期に対して著しい変化があり、高杯については「ある種の高杯の脚部が細長く発達」（森1958 p.241）していると述べた。

田辺昭三はＭＴ15型式期に「はじめて長脚１段透かし高杯が出現し、その後、長脚化が急速に進む」（田辺1966 p.50）、「高杯の脚部は長大となり、長方形の三方向一段透しが一般化する」（田辺1981 p.40）と評価した。

中村浩はⅡ型式１段階には「高杯の長脚化が顕著に表れる」（中村2001 p.88）と指摘している。

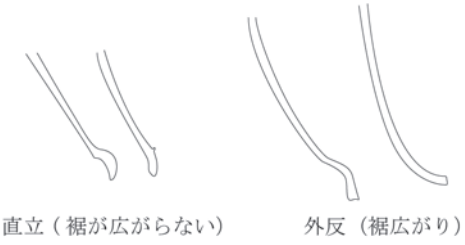
これらの研究史をまとめると、横穴式石室出現前後における高杯の画期とは①長脚化、②段数、③透かし孔の形状の３点が主な基準点となっている。その背景として、横穴式石室の採用に伴い、墓室空間が拡大し、それによって器形変化が起きるという一つのモデルが提示され（田辺1981、藤原1985）、以降の研究でも見栄えよく食物を供えるために、一層長脚化した高杯が必要とされる（植田2012 p.142）など、その図式が継承されてきた。

確かに時期差の指標として、「長脚化」は非常に有用である。しかし、土器の形状が供給先にも規定されうるとの立場をとる場合、須恵器の器形は長脚志向や、透かしを変化させるだけでなく、それ以外の細部にも変化を及ぼした可能性も考慮できるだろう。そのため、従来着目されていなかった部位や視点から、土器の形状を再度検討する必要がある。

その中でも、脚部は高杯の接地面が安定するか否か、すなわち食器としての機能に影響すると同時に、古墳での出土位置（＝高杯を置いた場所）と直接かかわる部位であると考えられるため、分類の基準とした。

３．対象資料・方法論の提示

口縁部については従来の有蓋高杯・無蓋高杯の区分を踏襲する。脚部については「直立」（脚部が直線的に広がり、一部の個体は脚部が鈎針状を呈する）、「外反」（裾広がりで、脚部を方形・楕円形におさめる）の２つに分類する（第１図）。



第１図　須恵器高杯の脚部形状の分類

対象時期はＴＫ216型式～ＴＫ43型式期とする。対象資料は近畿圏とその周辺地域に位置し、高杯を含む須恵器群が大きなかく乱を受けずに出土していると判断した古墳の須恵器高杯とする。そのデータは報告書の図面から、破片も含め、須恵器高杯と判別できるものをカウントした。

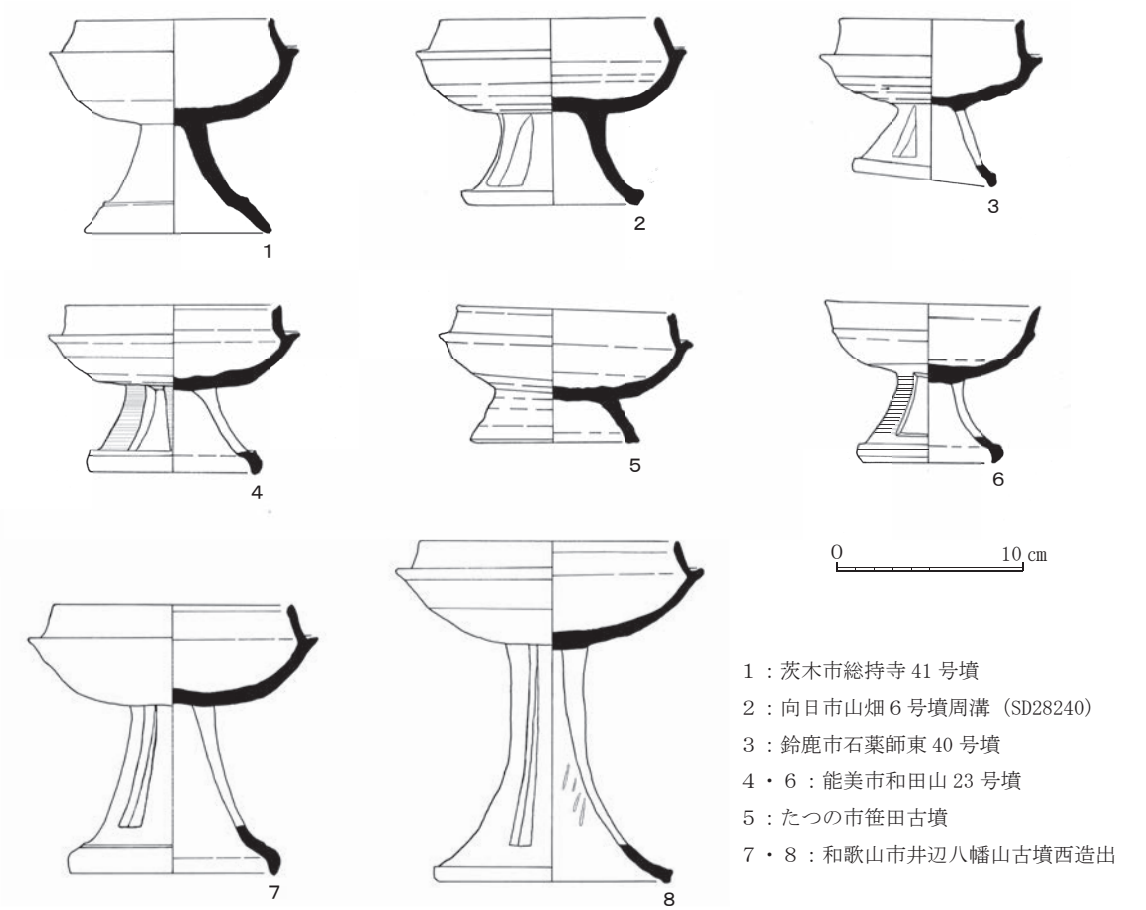
また、土器の出土位置は墳丘・周溝・造出、横穴式石室前庭部（埋葬主体部外）出土のものと、横穴式石室の玄室、木棺直葬墓の棺内外、墓壙出土のもの（埋葬主体部に伴う）の２者に大別する。木棺直葬墓では複数の埋葬主体部を持つものでも、古墳総体の出土点数を数えている。高杯については、表土や隣接地出土のものなど、遺構との対応関係が不明瞭なものは検討から除外した。

４．古墳と高杯の各部形状との対応関係

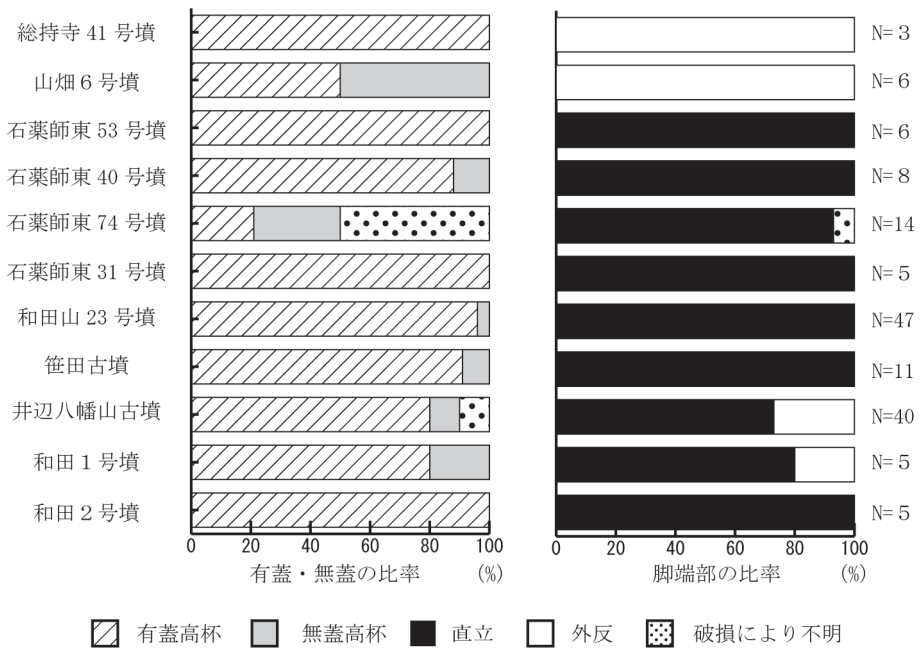
（１）墳丘・周溝・造出、横穴式石室前庭部（埋葬主体部外）の出土事例

第３図は墳丘・周溝・造出、横穴式石室の前庭部（埋葬主体部外）からの出土事例を、総持寺41号墳（ＴＫ216型式期）から、和田２号墳（ＴＫ10型式期）まで、時期別に並べたものである。これを見ると、破損した資料が多く、口縁部形態の全体像がつかみがたい石薬師東74号墳（ＴＫ23型式期）を除き、すべての古墳で有蓋高杯が主体を占めている。第２図には主要な土器を掲示した。

一方で、脚部に着目すると、総持寺41号墳から山畑６号墳（ＴＫ208型式期）までは外反する形態を持ち、石薬師東53号墳（ＴＫ23型式期）から笹田古墳（ＴＫ47～ＭＴ15型式期）では直立形態であるが、井辺八幡山古墳（ＴＫ10型式期）では直立形態が73％と多数を占めるものの、外反形態（第２図８）の出土が再度認められる。和田１号墳（ＴＫ10型式期）でも同様に直立形態が８割を占めるものの、外反形態の個体も報告されている。



第２図　墳丘・周溝・造出・前庭部出土の須恵器高杯

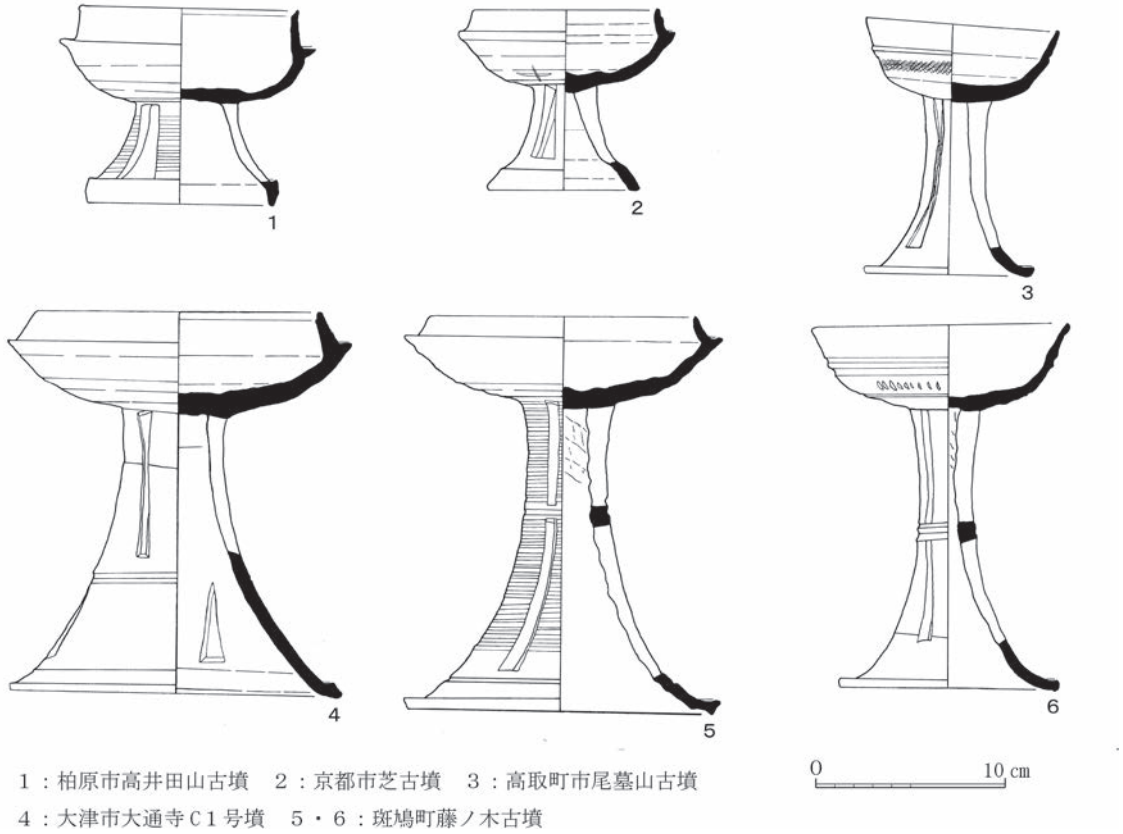


第３図　墳丘・周溝・造出・前庭部出土高杯の各種比率

以上をまとめると、埋葬主体部外の須恵器高杯に対して、①ほとんどの古墳で有蓋高杯が主体を占める、②脚部はＴＫ208型式期まで外反形態、ＴＫ23型式期～ＴＫ10型式期まで直立形態が中心的となるが、ＴＫ10型式期には外反形態を持つものが少量出現することが指摘できる。

（２）横穴式石室の玄室内から出土した事例

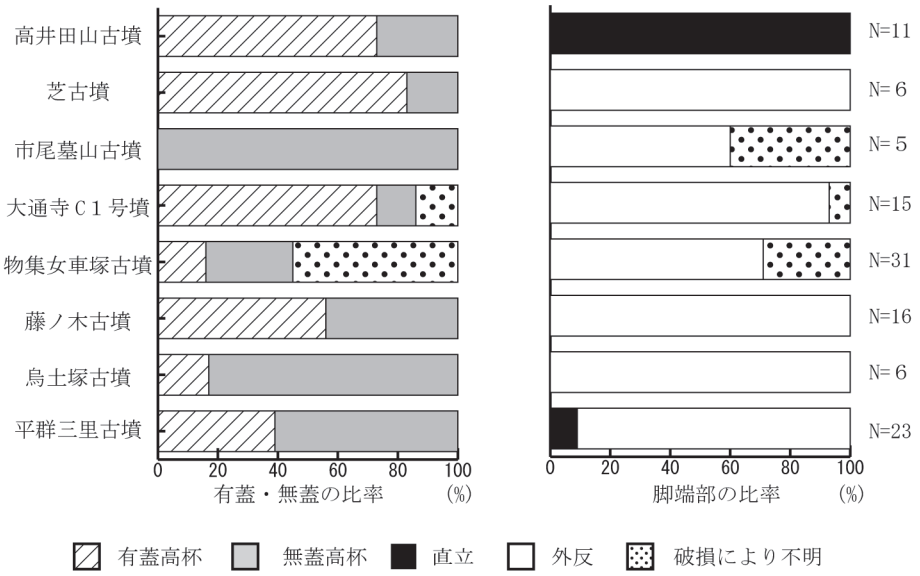
第４・５図は横穴式石室の玄室内からの出土事例を、高井田山古墳（ＴＫ47型式期）から、平群三里古墳（ＴＫ43型式期）まで、時期別に並べたものである。これを見ると、高井田山古墳・芝古



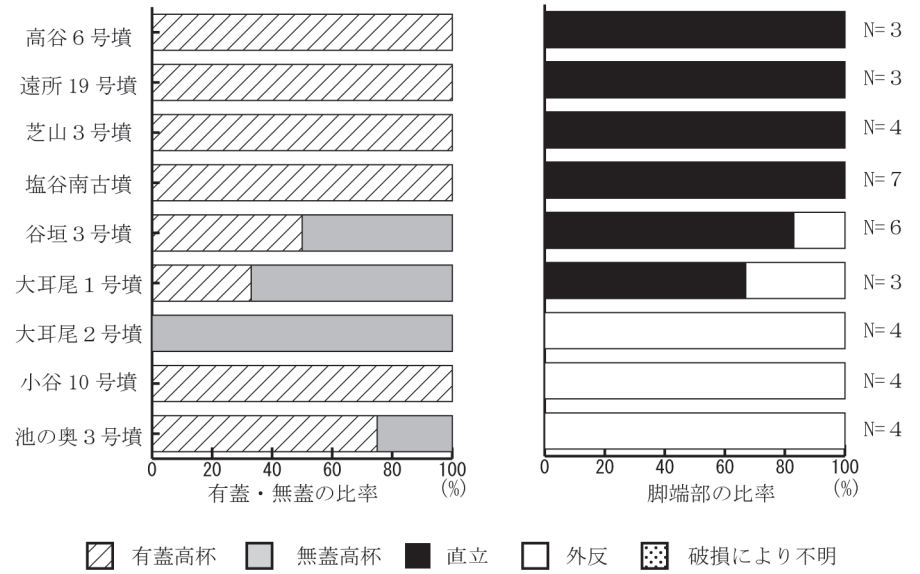
１：柏原市高井田山古墳　２：京都市芝古墳　３：高取町市尾墓山古墳
４：大津市大通寺Ｃ１号墳　５・６：斑鳩町藤ノ木古墳

第４図　横穴式石室の玄室から出土した須恵器

墳（ＭＴ15型式期）、大通寺Ｃ１号墳（ＴＫ10型式期）、藤ノ木古墳（ＴＫ43型式期）で有蓋高杯が半数以上を占めている。一方で、市尾墓山古墳（ＭＴ15型式期）・烏土塚古墳（ＴＫ43型式期）・平群三里古墳では無蓋高杯が過半数を占める。物集女車塚古墳（ＴＫ10型式期）は破損した資料が多く、有蓋高杯・無蓋高杯いずれが主体を占めるのか判別しがたい。



第５図　横穴式石室の玄室出土高杯の各種比率



第６図　木簡直葬墓の埋葬施設に伴う高杯の比率

脚部に着目すると、高井田山古墳ではすべての個体が直立形態であるのに対し、それ以外の古墳では90％～100％の割合で、脚部が外反形態を呈する高杯が出土している。

つまり、①有蓋高杯が主体を占める古墳と、無蓋高杯が主体を占める古墳の２パターンに大別できる、②高井田山古墳を除き、外反形態の脚部を持つ高杯が90～100％を占める、とまとめられる。

（３）木棺直葬墓の埋葬主体部に伴う事例

第６図では木棺直葬墓の埋葬主体部に伴うと考えられる出土事例を、時期別に整理した。これを参照すると、高谷６号墳（ＴＫ208型式期）から塩谷南古墳（ＭＴ15型式期）までの事例、および小谷10号墳（ＴＫ10型式期）ではすべての個体が有蓋高杯である。一方で、谷垣３号墳（ＭＴ15型式期）は有蓋高杯・無蓋高杯が同数出土し、大耳尾１号墳（ＭＴ15型式期）、同２号墳（ＴＫ10型式期）ではそれぞれ67％、100％を無蓋高杯が占めるようになる。また、池の奥３号墳（ＴＫ10型式期）

では第１主体部副室出土のものはすべて有蓋高杯であるものの、第４主体部棺外からは無蓋高杯の出土が認められ、埋葬主体部によって器形の使い分けがなされている。

脚部を見ると、高谷６号墳から塩谷南古墳まではすべての高杯が直立形態であるが、谷垣３号墳、大耳尾１号墳ではそれぞれ17％、33％と徐々に外反形態の個体が増加し、大耳尾２号墳以降はすべて外反形態を呈する。

これらの検討により、以下のことが明らかとなった。①ＴＫ47型式期までは有蓋高杯が主体を占めていたものの、ＭＴ15型式期以降、無蓋高杯の比率が増加する、②ＭＴ15型式期以降は脚部が外反形態を呈する個体の比率が高まり、直立形態を示すものと徐々に入れ替わる。

（４）口縁部形状についての考察

それぞれの出土位置と器形の関係性についてみてみよう。まずは、口縁部形状について扱う。墳丘や造出など埋葬主体部外の出土例ではいずれの古墳でも有蓋高杯が半数以上を占めていた。埋葬が完了したのち、墳丘や造出にて行われた墓前祭祀では、主に有蓋の高杯が用いられたのだろう。

これに対して、横穴式石室の玄室内では有蓋高杯主体、無蓋高杯主体の組成が併存する。有蓋高杯が高率を占める組成については、寺前直人の議論を参考にしたい。寺前は、墳丘や墳裾に置かれた土器群が、在来の器種構成を維持しつつ畿内型の横穴式石室へと持ち込まれ、土器を含めた葬礼を含めて保守的に継承されたと述べた（寺前2012 pp.20・21）。有蓋高杯を主体とする組成についても、墳丘・造出上の旧来の枠組みが維持されたのだろう。一方で、無蓋高杯が主体となる器種構成は横穴式石室の玄室に特徴的である。

今回の検討では、ＴＫ43型式期の古墳では有蓋高杯を主体とする組成は残存するものの、ＴＫ43型式期以前に対して無蓋高杯の比率が増している点に着目したい。市尾墓山古墳などでみられた無蓋高杯を一定率含む類型が、ＴＫ43型式期では影響力を強めると解釈できる。ただし、有蓋高杯の比率は藤ノ木古墳では56％、平群三里古墳では39％となり、有蓋・無蓋高杯の併存関係とすべきかもしれない。

木棺直葬墓の埋葬施設に伴うものではＭＴ15型式期に際して無蓋高杯の割合が増加する。畿内型の横穴式石室が拡散する時期と合致するが、その背景については脚部の検討と合わせ、後述することにしたい。

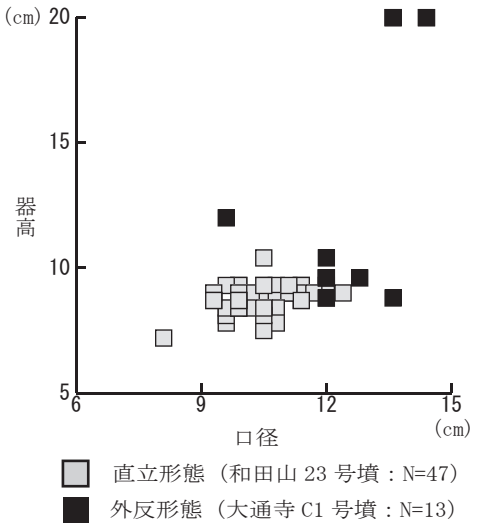
（５）脚部形状についての考察

墳丘・周溝・造出出土の脚部は先述のようにＴＫ208型式期までは外反形態、ＴＫ23型式期以降は直立形態が主体を占める。直立形態は、墳頂・造出などの盛土中に脚の先端を埋めれば安定して置けると考えられる。つまり、脚部の形状が墳丘や周溝、造出などで行われる墓前祭祀に適するように変化したためと想定する。

一方で、横穴式石室の玄室より出土する高杯は、高井田山古墳を除き、脚部が外反しているものが主体となる。礫敷の玄室床面に置くには、接地面が少ない直立形態よりも、接地面積の広い外反形態が適しているのだろう。ただし、高井田山古墳（ＴＫ47型式期）の段階では、畿内型の横

穴式石室が出現する初現期であり、外反する脚部が成立していなかったため、脚部が直立形態の須恵器高杯を用いたものと考える。

その一方で、横穴式石室を採用し、玄室内に土器を納める古墳であっても、埋葬主体部外の須恵器高杯については旧来パターンの延長線上に位置づけられる場合もある。例えば、和田１・２号墳（ＴＫ10型式期）は両者ともに埋葬主体部は横穴式石室であるが、墳丘裾や石室前庭部において高杯を出土している。それらは有蓋高杯が主体であり、脚部は直立形態である。(注1)



第７図　須恵器脚部形状と
器高・口径の関係性

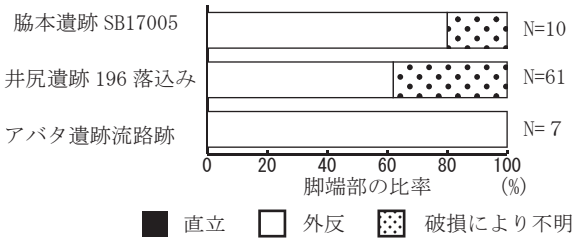
このように、出土位置と器形には強い対応関係が認められる。消費地での土器使用法が、脚部の形など細かい須恵器の形状に強く反映される可能性を示せたのではないだろうか。第７図に古墳出土の一括資料を基にして、脚部の形状と器高・口径の関係を示した。これを見ると、脚部が直立形態を示すものが、器高は7.2～10.4cm、口径が8.1～12cmの範囲に収まる。一方で、外反形態のものは器高が8.8cm～20cm、口径が9.6～14.4cmと、相対的に大型化が進展している。このように、須恵器高杯の長脚化と、脚部形状には明確な対応関係が認められる。

木棺直葬墓の埋葬主体部に伴う事例では、ＴＫ208～ＴＫ47型式期ではすべての個体が直立形態の脚部を持つが、ＭＴ15型式期以降、外反形態のものが出現する。ＴＫ10型式期では、脚部が外反する高杯が100％を占めるようになり、直立形態に完全にとってかわる。私はこの事象について、以下のように考える。

ＴＫ47型式期以前の須恵器高杯については、墳丘・周溝出土のものと同様、直立形態の脚部を有することから、棺の設置、墓壙を埋め戻す作業単位の一環として、飲食物の供献とその埋納が行われたものと想定する。一方で、ＭＴ15型式期以降、無蓋高杯の比率が増し、外反形態の脚部を持つ高杯が出土し始めることは、背景に横穴式石室の影響を想定せざるを得ないであろう。ＭＴ15～ＴＫ10型式期に、横穴式石室の構築技術が移入されなかった、あるいは前代の埋葬施設を保守的に維持した古墳群でも、新出器形の出現という形で在来の木棺直葬墓に影響が及んだとも解釈できるのではないだろうか。

ただし、その扱いについては、造営主体間で差異がみられる。例えば、池の奥３号墳第１主体部では副室が設けられ、中から高杯を含む須恵器群が出土した（大槻1985）。埋葬主体部や付随施設に土器を納める思想を反映した事例といえる。一方で、谷垣３号墳（岸岡1999）や大耳尾１・２号墳（岡林編2014）では棺上、棺外での須恵器の出土が報告されている。旧来の棺上の古墳祭式を継続し、墓室空間の拡大がなされないために、口径の小さい杯蓋や瓹と、長大化した杯・高杯が併存する（細川2016 p.164）と述べられているように、従来の供献祭祀の中に外反形態を持つ高杯

が取り込まれたと解釈している。



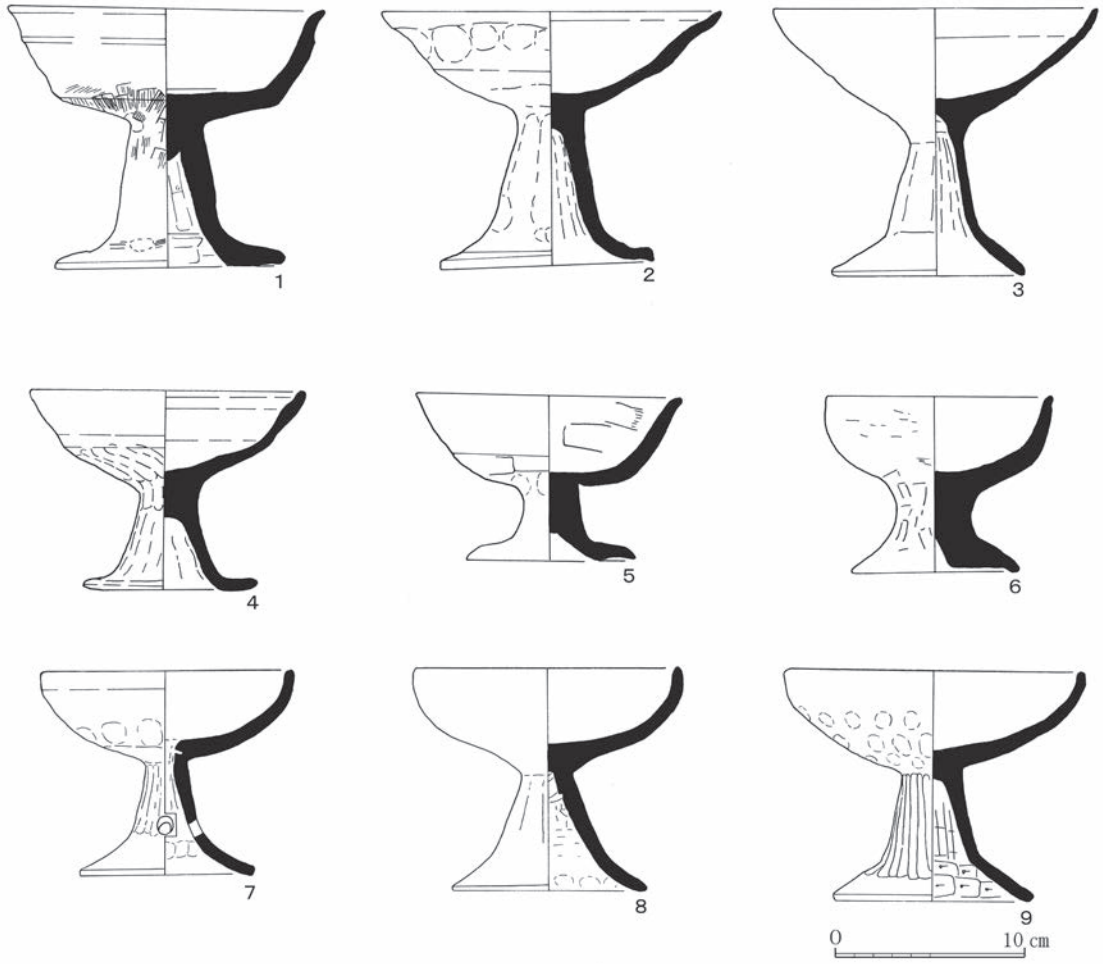
第８図　集落出土土師器高杯の脚端部形態の比率

５．外反形態の導入の背景

横穴式石室から出土する須恵器高杯は、礫敷の床面に安置するために外反形態を採用した可能性があると明らかになった。鮮朝半島から新来の埋葬施設が伝達するとともに、須恵器製作にも朝鮮半島の影響が及んだ可能性も想定できる。しかし、横穴式石室の導入に伴い、倭の内部で自発的に器形変化が発生したとも考えられる。この問題を考えるため、土師器高杯を検討に加えたい。

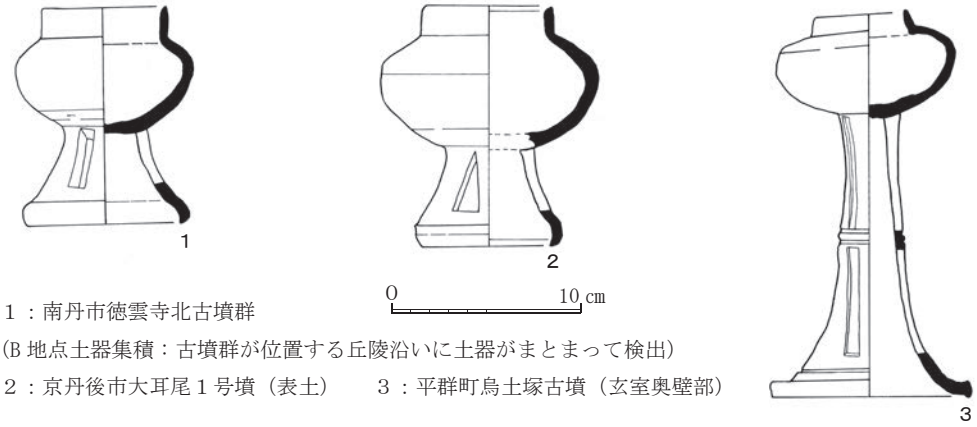
近畿地方のＴＫ23～ＴＫ10型式期を対象にして、土師器高杯が複数個体、良好に検出されている集落遺跡を集積し、脚部形状をグラフ化した(第８図)。破損により脚部を失った個体の存在を勘案しても、外反する脚部が過半数を占めている点は特徴的である。

その一方で、高杯の形状が長脚かつ直線的に口縁部が広がるもの(第９図１～３)、短脚かつ口



１・５・６：京丹後市アバタ遺跡流路跡　２・３：長岡京市下海印寺遺跡第１号住居
４・７：桜井市脇本遺跡 SB17005　８：高槻市井尻遺跡 196 落込み　９：亀岡市鹿谷遺跡 SH9204

第９図　集落出土の土師器高杯



１：南丹市徳雲寺北古墳群
(B 地点土器集積：古墳群が位置する丘陵沿いに土器がまとまって検出)
２：京丹後市大耳尾１号墳（表土）　３：平群町烏土塚古墳（玄室奥壁部）

第10図　古墳出土の脚付短頸壺

縁部が外反して広がるもの(第９図４・５)、椀型の口縁部を持ち、長脚・短脚いずれとも判断しがたいもの(第９図６～９)など多様性に富んでいる(注2)。つまり、個別生産の枠組みの中で、脚部が外反するという緩やかな共通性が存在するのである。私はその背景とは、裾広がりの形状を採用することで設置面積を広げ、高杯をより安定して立たせるためであると考えている(注3)。

翻って須恵器高杯の脚部が外反する理由は、以下のように推測することもできる。６世紀初頭以降、外来の埋葬主体部(横穴式石室)が急速に普及・拡散するとともに、死生観も変化し、玄室に納めるための高杯の需要も増大した。このような変化に対して、須恵器工人は在来の土器製作の中で培われてきたアイデアを活用し、礫敷の床面に設置しやすい形状を志向したのだろう(注4)。

朝鮮半島からの影響と倭内部での変容、２つの仮説を想定したが、筆者の力不足により、朝鮮半島の資料が検討できなかったため、いずれが妥当であるかは現状では判断しがたい。ひとまずは今後の課題として、資料集成や他地域との比較検討を重ね、改めて判断したい。

また、予察段階ではあるものの、須恵器の脚付短頸壺でも同様に直立から外反へと脚部形態の変化が認められる(第10図)。本稿で指摘した画期が須恵器高杯に限らず、器種横断的なものである可能性も十分想定できるだろう。

６．おわりに

須恵器高杯の出土位置と口縁部形状、脚部の形状が対応関係にあることが明らかとなった。一方で、今後の課題としては、①地域性の有無、②朝鮮半島の資料との検討などがあげられるだろう。この研究を通じて、横穴式石室の導入が土器の細部形状にも影響を及ぼした可能性を提示したい。

謝辞　本論を執筆するうえで、大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻、博士前期課程１年の我妻佑哉氏、同僚の当調査研究センターの皆様には多くのご助言を賜りました。末筆ながら、感謝申し上げます。

（のじま･はるゆき＝当調査研究センター調査員）

注１　和田１号墳では横穴式石室の前庭部からも須恵器群が出土しているが、検出状況の写真を見る限り、割れた須恵器も多数認められる。ある程度原位置を反映するとも解釈できる一方で、追葬時、あるいは後世の石材抜き取りの際に玄室内部から持ち出された可能性も残る。このため、今回の検討からは除外した。和田２号墳の須恵器群は同様に前庭部出土のものであるが、写真・図面を見る限り、完形の個体が複数確認され、原位置を反映するものと判断した。

注２　長岡京市下海印寺遺跡第１号住居、亀岡市鹿谷遺跡 SH9204 は須恵器を含む一括資料ではあるものの、土師器高杯は少数の出土である。そのため、参考資料として扱い、グラフには反映しなかった。

注３　このように考えると、直立形態の脚部は平坦面に置くには不安定であり、脚端部を土の中に据える前提の形状であると推定できる。

注４　同僚の肥後弘幸氏から外反する脚部の採用について、大型化・長脚化した高杯を支えるためより安定した形状を志向した可能性もあるとご教示いただいた。筆者の想定する仮説といずれが妥当な解釈であるのか今後の課題としたい。

参考文献

〈報告書〉

秋山浩三・山中章編 1988『物集女車塚古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第 23 集　向日市教育委員会

伊藤裕偉編 2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』三重県埋蔵文化財調査報告 259　三重県埋蔵文化財センター

井上主税編 2014『脇本遺跡』Ⅱ奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 115 冊　奈良県立橿原考古学研究所

大槻眞純 1985「３・４号墳の調査」『池の奥古墳群』福知山市文化財調査報告書第７集　福知山市教育委員会

大崎康文編 2005『滋賀県緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ－２』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・（財）滋賀県文化財保護協会

岡林峰夫編 2014『大耳尾古墳群発掘調査報告書（１・２・３・４・５号墳)』京都府京丹後市文化財調査報告書第 10 集　京丹後市教育委員会

奥和之編 2005『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004－２　大阪府教育委員会

鹿野塁編 2017『井尻遺跡２』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 276 集　（公財）大阪府文化財センター

河上邦彦編 1977『平群三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 33 冊　奈良県教育委員会

河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第５冊　高取町教育委員会

岸岡貴英 1999「谷垣３号墳」『京都府埋蔵文化財調査概報』1999　京都府教育委員会

熊井亮介編 2018『芝古墳（芝１号墳）調査総括報告書～乙訓における後期首長墓の調査～』京都市文化市民局

黒坪一樹 2012「塩谷南古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第 152 冊　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

小池寛 1987「芝山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 25 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

佐伯英樹編 1998『滋賀県栗太郡栗東町和田古墳群』栗東町文化財調査報告書第４冊　栗東町教育委員

会
伊達宗泰・岡幸二郎編 1972『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 27 冊　奈良県教育委員会
辻健二郎 1997『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』園部町文化財調査報告第 13 集　園部町教育委員会
中塚良 2007「長岡宮跡第 282 次～朝堂院西方官衙、山畑古墳群、乙訓郡衙跡、鶏冠井興隆寺跡～」『長岡宮「翔鸞楼」修理式遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第 75 集　（財）向日市埋蔵文化財センター
中村孝行 1973「６号墳」『高谷古墳群発掘調査概要』綾部市教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所編 1990『藤ノ木古墳』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
西口和彦・種定淳介編 1982『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ笹田古墳』兵庫県文化財調査報告書第 15 冊　兵庫県教育委員会
野島永・河野一隆 1993「鹿谷遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 52 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
服部芳人・船越重伸編 2000『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 200 － 2　三重県埋蔵文化財センター
肥後弘幸 1990「アバタ遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』1990　京都府教育委員会
増田孝彦・岡崎研一 1992「（１）遠所古墳群」『京都府遺跡調査概報』第 50 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
森浩一編 1972『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
安村俊史・桑野一幸編 1996『高井田山古墳』柏原市文化財概報 1995 －Ⅱ　柏原市教育委員会
吉岡康暢・河村好光編 1997『加賀能美古墳群』寺井町教育委員会
渡辺誠編 1982『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』長岡京市文化財調査報告書第 10 冊　長岡京市教育委員会
〈論文〉
植田隆司 2012「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍谷大学考古学論集Ⅱ－網干善教先生追悼論文集－』龍谷大学考古学論集刊行会
木許守 2009「群集墳被葬者層における須恵器の流通について」『考古学研究』第 56 巻第３号　考古学研究会
木許守 2016「古墳時代の須恵器流通についての一考察（２）－丹波地域の事例検討から－」『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』和泉書院
木許守 2019「古墳時代の須恵器流通についての一考察（３）－葛城・石光山古墳群の事例検討から－」『和の考古学―藤田和尊さん追悼論文集―』ナベの会考古学論集第１集　ナベの会
佐藤隆 2007「６世紀における須恵器大型化の諸様相－陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その３－」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号　大阪市文化財協会
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　研究論集 10　平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
寺前直人 2012「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」『駒沢史学』第 77 号　駒沢史学会
中村浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流５　名著出版

藤原学 1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念獻呈論文集　乾』末永先生米寿記念会

藤原学 1991「須恵器の編年　１．近畿」『古墳時代の研究』第６巻土師器と須恵器　雄山閣出版株式会社

細川康晴 2016「古墳時代後期の京都」『京都府埋蔵文化財論集』第７集　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

森浩一 1958「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁全集』第１巻　河出書房

森本徹 2012「横穴式石室と土器」『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会

山田邦和 2011「須恵器の編年 西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１　同成社

〈図版出典〉

第１図　１・３・５・６・７・８：筆者作成

第２図　いずれも次の文献から筆者再トレース

１：奥編 2005　２：中塚 2007　３：服部・船越編 2000　４・６：吉岡・河村編 1997

５：西口・種定編 1982　７・８：森編 1972

第４図　いずれも次の文献から筆者再トレース

１：安村・桑野編 1996　２：熊井編 2018　３：河上編 1984　４：大崎編 2005

５・６：奈良県立橿原考古学研究所編 1990

第９図　いずれも次の文献から筆者再トレース

１・５・６：肥後 1990　２・３：渡辺編 1982　４・７：井上編 2014　８：鹿野編 2017

９：野島・河野 1993

第 10 図　いずれも次の文献から筆者再トレース

１：辻編 1997　２：岡林編 2014　３：伊達・岡編 1972

研究ノート

初出考古資料「司馬温公甕割」伏見人形とその周辺

加藤雄太・小池　寛

1．はじめに

今回報告する資料が出土したのは平安京跡（左京一条三坊三町）の発掘調査である。調査地は、京都府庁旧本館東側で、その排土内より回収された。左京一条三坊三町の調査は３面にわたる調査が行われており、ラベルに記された出土日から、第１面（近代から江戸後期）調査後重機により遺構面掘削を行った際に同資料をまきこんだものと考えられる。当地は豊臣秀吉による聚楽第造営に伴って併設された大名屋敷が位置すると想定され、江戸時代前期には広範な土地割を有する町家が位置した。その後、幾度かの火災を経て地割は細分化されたようで、いわゆる「うなぎの寝床」といった奥行きのある町家が江戸時代後期には立ち並んでいたことが調査から明らかとなっている。その後、嘉永７（1854）年大火の被害から復興が遅れていた当地に京都守護職の上屋敷が設置されることとなり、広範な区画が整備される。この区画内には明治以降様々な公的組織が土地利用し、京都府中学校を経て明治17（1884）年に京都府庁が当地に移転し現代にいたる。

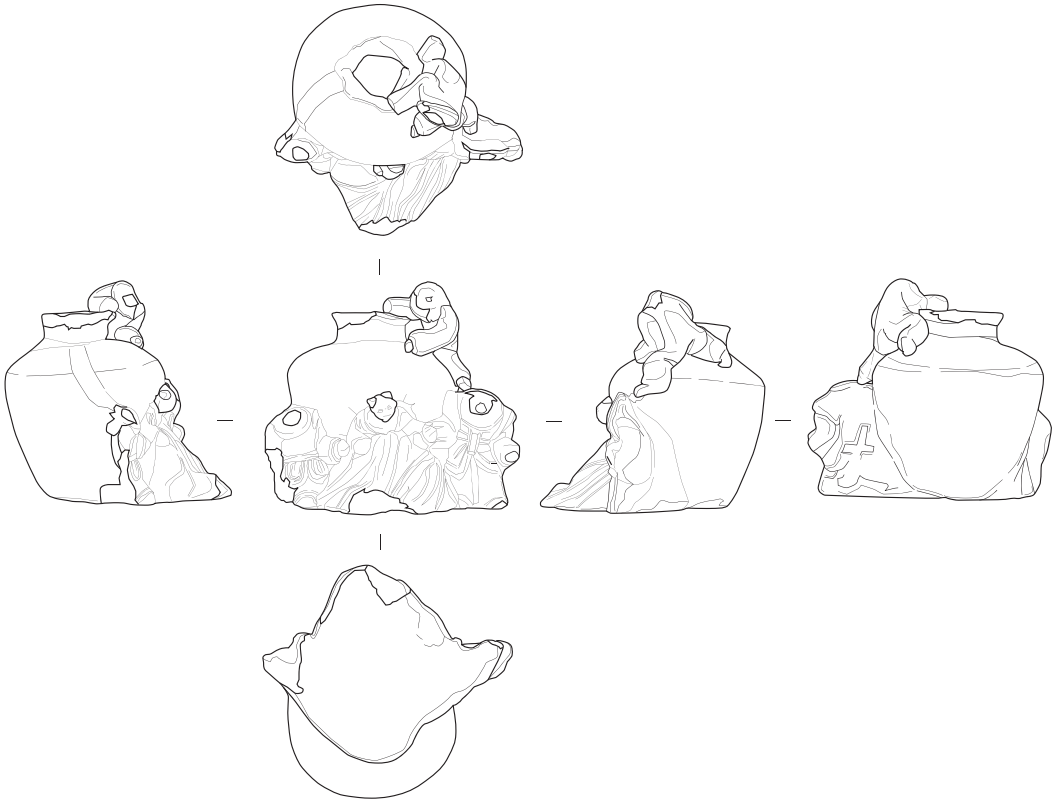
本稿で紹介する土人形は、以下に述べるように発掘調査での初出資料である可能性が高い。そのため、正確な実測図と写真により形態的特徴をさらに詳しく述べ、出土状況を正確に捉えたうえで、土人形の編年的観点から製作年代の検証を行う。また、当該資料の主題である「司馬温公甕割」説話の成立と日本国内における当該説話が、建築や山車等にどのように取り入れられたかについて、考察するものである。

2．資料の特徴

当節ではまず、今回出土した司馬温公甕割人形（写真１、第１図）の特徴を論じ、その年代の推定を試みたい。ちなみに京都市内において当該人形の出土例は、既刊の文献を見る限り、初出と考えている。

司馬温公甕割人形の表面には白い塗料や変色した塗料が付着している。これらは膠と胡粉を溶かして人形の下地に用いた塗料で、白い塗料は砕

写真１　出土した司馬温公甕割り人形



第１図　司馬温公甕割り人形実測図　Ｓ＝1/3

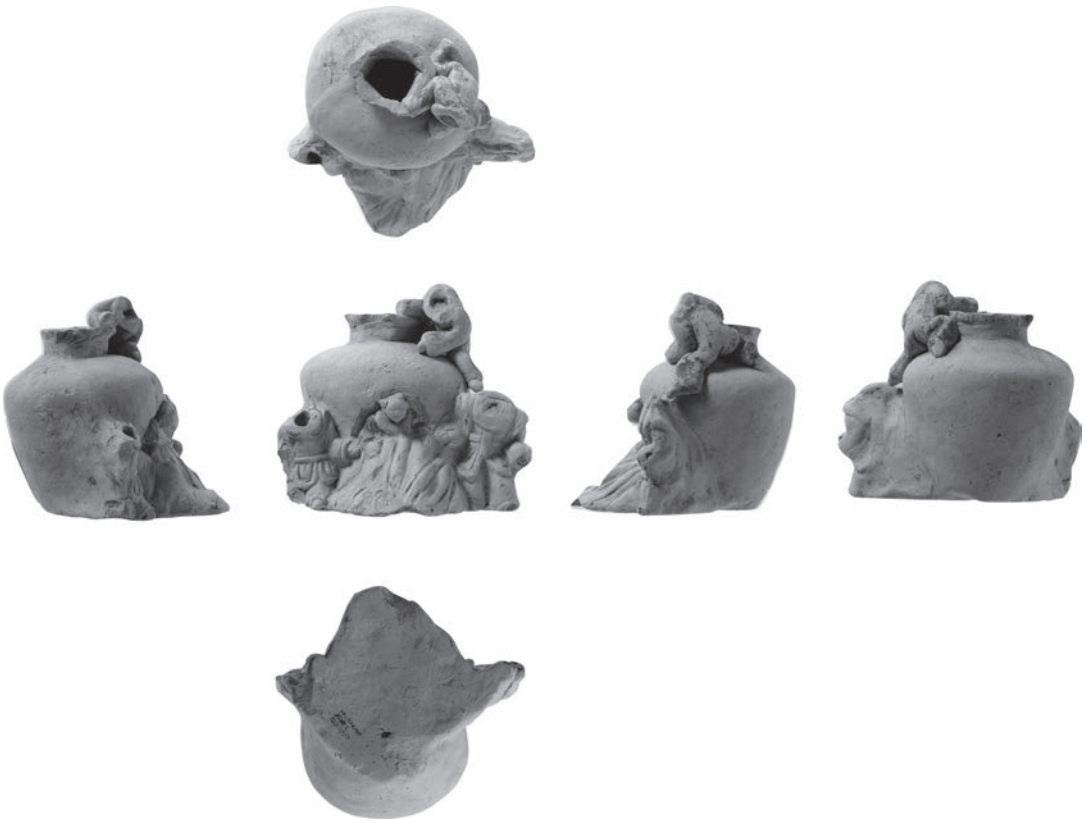
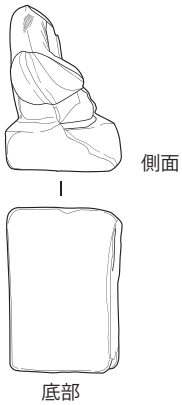


写真２　司馬温公甕割り人形展開写真

（1）新島会館別館地点出土の稲荷狐

（2）当調査地出土の差し込み式頭部の女形



（3）型合わせ目が前出する天神の土人形

第２図　類似土人形の細部

いた貝を原料にした胡粉である。また、表面に一部残存する雲母片は雌型から製品を離すための離型剤である。そして、この資料の胎土は淡黄白色を呈しており、典型的な深草の土であることから京都で作られていた土人形であると推測される。

３．成形技法から

当資料は型作りの製品である。甕の前面と背面を前後２枚の型を合わせて成型している。甕に登る人物は手びねり成形であり、頭部、肩部、両手先、胴体の四つの部位からなるが、差し込み式の頭部は欠損している。当該甕割人形の手びねりの部分はこの他に、甕中央の割れたところから顔を出す唐子の後頭部と両脇の人物の頭部があり、いずれも差し込み式の頭部である。なお、唐子の顔面は手びねりではなく型を用いて表現している。

このように頭部を手びねりで成形し顔の部分を型抜きして表現する方法は、江戸後期の資料でたびたび見かける。手びねり差し込み式の首で型抜きの顔をもつ製品の類例として新島会館別館地点の土坑79の資料（第２図(1)）と、司馬温公甕割人形と同じ調査地のＳＤ2020出土の資料（第２図(2)）を類例として提示したい。ＳＤ2020は嘉永の大火に伴い埋没する町家に面する出水通りの道路側溝である。ＳＤ2020は下層の天明の大火（1788年）と想定される焼土を削平して造成されていることから、天明の大火後から機能し、嘉永の大火（1854年）にともない廃絶したと考えられる。

また、型の合わせ目に関して、多くの土人形は前後型の場合、資料の側面には垂直の合わせ目が確認できるが、甕の口縁部側面から両脇にひかえる人物の頸部・肩部を経て、その側面・底部に到り、そこから水を表現する前出部分に合わせ目が出る。側面から観察すると、Ｉ字状ではなく、Ｌ字状の合わせ目を呈する。これは、当該人形が底部付近に奥行きがでてくる表現であるため、Ｉ字状では底部付近の前面の型抜け勾配がきつくなりすぎてしまい成型が困難になってしまう。こうした問題に対処するために合わせ目を前出させ、抜け勾配を緩やかにしたのであろう。

この前出する型合わせ目の資料は、常盤井殿町遺跡や新島会館地点の発掘調査で見つかっている天神の土人形にみられる（第２図（３））。いずれも年代は19世紀（Ｖ期）に比定される（加藤2016）。

４．表現方法から

次に司馬温公甕割人形に用いられている表現を検討したい。

土人形の彫刻は陰刻と陽刻に大別できる。今回の資料は服飾の表現が陰刻であるので、拙著（加藤2016）からⅢ期（18世紀半ば）以降の年代が与えられる。また、甕から出てきている唐子の肩部のしわ表現はⅤ期の天神資料等でみられるものである。そのほかの両脇の人物の唐風の服装や水流の表現は土人形の表現ではあまりみられず、ここからこまかな年代などを決定することは困難であるが、全体として立体的で複雑な表現を有していることから、Ⅴ期（19世紀）段階の資料と考えられる。

５．年代の考察

上記のように成形技法と表現を検討した結果、司馬温公甕割の人形が製作された年代は成形技法からⅤ期（19世紀）であり、表現からはⅢ期からⅤ期（18世紀半ばから19世紀）であると判断した。Ⅲ期以降とする根拠は人形表現の彫刻が陰刻であることであるが、この属性はⅢ期以降、例外があるものの普遍的にみられる属性である。その他、肩部の表現をはじめ人形の有する表現が立体的で複雑であることから、当該資料はⅤ期段階のものとしたい。

この資料の年代をもとに、司馬温公甕割人形の受容者について考えたい。平安京左京一条三坊三町は嘉永７（1854）年以降京都守護職の上屋敷が設置される。当調査では上屋敷の遺構は確認できるものの、上屋敷に伴う確実な遺物は確認できないことから上屋敷以前の段階の遺物であると考えたい。上屋敷設置以前に位置した町家は、天明８（1788）年の天明の大火による被害から復興した後、嘉永７（1854）年の嘉永の大火で罹災するまでの期間、当地で生活していた。こうしたことから恐らく18世紀末から19世紀半ばまでの期間に位置した町家の住人が受容した土人形であると考えるのが妥当であろう。

（加藤雄太）

６．司馬温公と神童伝説「甕割」

司馬温公の名は「光」、中国北宋時代の政治家であり儒学者、そして、歴史家である。陝州（せんしゅう）夏県涑水（そくすい）郷（現在の山西省運城市夏県）の出身で、号は迂叟（うそう）、諡は文正、温国公の爵位を贈られ、司馬温公と呼ばれた。1066年、勅命により編纂した『資治通鑑（しじつうかん）』は、中国の戦国時代から五代までの1362年間の史実を考証し、当時、集め得る資料を網羅した歴史書であり名著とされる。そのような背景もあり中国での司馬温公の漢詩や書、名言、著書は、現代社会の指針として重要視されている。

さて、司馬温公の幼少期の逸話である「甕割」は、司馬温公が７歳の折に父が大切にする水甕の周囲で複数の友と戯れていた時、誤って水甕に落ちた友を助けるため、石で甕を割り友を助けた。父は、「器は軽し、人命は重し」と司馬温公を褒め讃えた逸話が神童伝説となった。甕割図（破甕救児（はようきゅうじ）文様）は、切手や絵本をはじめ、明代五彩染付甕等に登場する図像でもある。

７．日本における「司馬温公甕割」

司馬温公が著した『資治通鑑』は、日本において14世紀後半の南北朝時代には伝播しており、江戸時代には広く読まれた。特に「甕割」逸話は、江戸時代前期にあたる寛永16（1642）年に如儡子（にょらいし）により刊行された『可笑記』に既に記載されていることから、当該時期には情操教育の素材として認識されていたことがわかる。一方、甕割の図像は、背景にある人命尊重の思想が、当時の日本国内における道徳・情操教育の素材として取り込まれ、以下に述べるようにさまざまな文物に採用されることとなった。ここではその事例についてみていきたい。

郷土玩具　本稿で出土した土人形について述べた加藤雄太は、典型的な深草土によって作製されていることから京都の土人形であることを推定している。また、時期的には、同氏の編年観から19世紀の土人形であることを推定している。京都の土人形として一般的に良く知られている伏見人形の起源は、貞享・元禄期（1684～1704年）の絵図に土人形が登場することから、確実に当該時期までは遡り得るとされる。一方、幕末の文化文政年間（1804～1830年）には、伏見稲荷大社門前町に50余軒の人形屋が軒を連ねたとある。現在の窯元として「丹嘉」１軒のみが製作を継続している。写真４の伏見人形は、右手に石を振り上げる司馬温公と甕から助け出される童が、配置された甕割の土人形である。一方、写真５は現在の作品であるが、左は水甕を中心に司馬温公と童を配置する意匠が写真４と共通している点から、写真４の土人形は、「丹嘉」作と推定される。他方、写真５右は、福岡県春日市古型博多土人形である。その成立時期については、慶長年間（1596～1615年）に瓦職人であった正木宗七、そして、永享９（1437）年以降に博多櫛田神社で山笠人形を作った京木偶（でく）師であった小堀善左衛門の影響を受け、寛政９（1797）年生まれの４代目、中ノ子吉兵衛によって古型博多土人形が成立した。写真５右の人形は、７代目中ノ子勝美氏の作である。

写真４　伏見人形

写真５　伏見人形と古型博多人形
〈武本典子撮影〉
（左：窯元丹嘉作、右：中ノ子勝美作）

写真６は、滋賀県東近江市小幡土人形である。右が八代目細居文蔵（明治５～平成元年）作、左が九代目細居源悟（昭和14年～）作である。基本的な意匠は、伏見人形や古型博多人形とは異なっている。古型博多人形は初代細居安兵衛が、江戸時代中期に伏見人形を祖型として作製したのが始まりであり、現在では郷土玩具として流通している。司馬温公甕割の人命尊重の思想を幅広い年代層に広

写真６　滋賀県小幡土人形
（左：九代目細居源悟、右：八代目細居文蔵）

める役割を有していたと考えられる。このほか岩手県花巻市花巻人形にも司馬温公甕割の意匠が認められる。

磁器絵付け　東京都渋谷区戸栗美術館所蔵の伊万里焼酒井田柿右衛門様式の「色絵甕割人物文八角皿」（写真７）には、赤・青などの彩釉により甕割図が描かれている。17世紀後半の江戸時代の作品である。一方、18世紀初頭のドイツマイセン窯で焼成された磁器の一部にも甕割の意匠が採用されている。両者の図像は、水甕が童の膝下に小さく描かれており、いわゆる「司馬温公甕割」の故事を理解した絵付けではないことがわかる。

写真７　伊万里色絵八角皿
（東京戸栗美術館提供）

刀装具　刀装具での甕割図像は僅少である。江戸時代の無銘縁頭の朧銀磨地に片切り彫りの司馬温公と甕の一部が確認できる。

絵画　江戸時代後期の絵師葛飾北斎が描いた『北斎漫画』の一画材に司馬温公甕割絵がある。また、江戸時代末期から明治時代の浮世絵師河鍋暁斎（1831～1889年）や河鍋を師とする絵師津村洞養（1834～1905年）なども甕割絵を描いている。文化文政期は寺子屋が多く開設され、出版文化が華開いた時期でもある。庶民が教養を求め、復古的に中国故事が画材や読み物に取り込まれる時期でもある。

杉戸絵　滋賀県彦根市本町に所在する宗安寺は、井伊直政の正室東梅院により上野国高崎城箕郷に安国寺として創建される。直政が佐和山城主となり、安国寺からわかれて宗安寺と改める。写真８は、書院大玄関の杉戸に描かれた司馬温公甕割絵である。宗安寺が徳川家康の位牌安置所となり、家康ゆかりの寅絵や日光東照宮陽明門高欄の甕割彫刻と同じ意匠が描かれたと住職竹内眞道氏よりご教示をいただいた。

神社彫刻　日光東照宮陽明門は、元和３（1617）年に創建され、徳川家康21回忌にあたる寛永13（1636）年に徳川家光によって再建された。彫刻は狩野探幽が行い、彫刻や工芸などに江戸文化が凝縮されている。司馬温公甕割の彫刻は、陽明門上層部の高欄に掲げられた唐子遊びの一つの造形である。神社建築において当該彫刻を有する建物は、基本的に関東に圧倒的に多いことが確認できるが、関西では、兵庫県丹波市柏原八幡宮欄間に当該彫刻が確認できる。柏原八幡宮は、万寿元（1024）年に京都岩清水八幡宮から分霊勧請により丹波別宮として創建される。天正７（1579）年の明智光秀による丹波攻めの際、社殿が焼失し、天正10（1582）年から３年をかけて羽柴秀吉により再建されている。甕割彫刻が、創建当初から飾られていたか否かは不明である。

写真８　宗安寺杉戸絵（彦根市宗安寺提供）

写真９　山車
（四日市商店連合会提供）

その他の神社建築において如何に司馬温公甕割の逸話が広く認識されていたかを示す事例を見ておきたい。栃木県曹洞宗黒羽山大雄寺や同佐野市根古屋神社、同八坂神社、同小山市熊野神社、そして、埼玉県熊谷市歓喜院本殿男唐破下の彫刻など、枚挙に遑がない状況である。

山車（だし）　山車とは、祭礼に出る練り物の屋台のことで、山や鉾、人形などで飾り立てる標山（しめやま）である。京都八坂神社の祇園祭の風流華麗な山鉾が各都市の山車に影響を与えたとされる。写真９は、三重県四日市市「大四日市まつり」の山車である。昭和20年に空襲で消失した司馬温公甕割の山車が四日市商店連合会によって再建された。一方、横須賀祭りは、江戸時代前期に横須賀御殿を訪れた尾張藩の徳川光友を歓迎するために行われた傘鉾祭りが起源とされ、愛宕神社の秋期祭礼での山車の曳き回しが直接的な起源とされる。甕内部には弘化２(1845)年の製作年代を示す墨書が確認されている。現在、尾張に残るからくり人形の題材としては、唯一とされる。その他、山車の欄間や鬼板などの彫刻に司馬温公甕割の意匠が散見される。時代の新旧を問わず、司馬温公甕割が採用されていることに注目しておきたい。

近代造形　京都市上京区上御霊神社境内には、「清明心の像」（写真10）として、司馬温公甕割像が据えられている。この像は、児童の権利宣言が採択されて20周年を記念して定められた1979年の国際児童年制定を記念し、江里宗平・敏明によって作製され、伊豆蔵福治郎によって寄進されたものである。造形の基層にある児童の権利に関する宣言および条約の重要性を見る者に再認識させている。

（小池　寛）

写真10　上御霊神社
「清明心の像」

８　まとめ

以上のように出土した司馬温公甕割土人形について、資料からよみとれる内容をまず論じた。発掘調査の状況から18世紀末から19世紀半ばの町家の資料である可能性と成型技法と表現から19世紀に作成された土人形である可能性を指摘した。現時点では、国内初出資料との認識をもっているが、伏見人形は、同一意匠の人形を多数生産する傾向があることから、今後も出土事例について注視していきたい。

さて、 司馬温公甕割図の基層にある「器

は軽し、人命は重し」に表される人命尊重の思想が、江戸時代の情操教育において重要視され、郷土玩具や磁器染付、神社彫刻などに採用されたことを論じた。特に、江戸時代後期の司馬温公甕割絵が描かれた文化文政期は、先に述べたように庶民が教養を求め、復古的に中国故事が画材や読み物の題材になった時期でもある。また、郷土玩具にも当時の情操教育の思想をみることができる。一方、彦根市宗安寺の杉戸絵は、宗安寺が徳川家康とのゆかりが深いことから日光東照宮にもある司馬温公甕割の意匠が描かれたことを記した。

近世考古学研究は、遺構や陶磁器研究など、近年、多岐にわたっているが、本稿で取り上げた伏見人形は、窯元や郷土玩具からのアプローチとともに考古学的な編年研究が本稿執筆者である加藤により進展している。今後、近世考古学研究は、考古学的な研究もさることながら、関連する文献や図像研究などから、当時の情操教育や習俗などを明らかにできる分野でもある。

本稿を執筆するにあたり、浄土宗宗安寺住職竹内眞道氏からは寺院の由緒や司馬温公甕割杉戸絵についてご教示と画像掲載許可をいただいた。また、戸栗美術館黒沢愛氏には色絵甕割人物文八角皿の画像掲載許可について格段のご配慮をいただいた。一方、郷土玩具自体についてと伏見人形や古型博多人形、小幡土人形の類例についてのご教示に加え、所蔵品の写真撮影と画像掲載許可いただいた郷土玩具平田の平田惠子氏には格別なご配慮をいただいた。最後に、司馬温公甕割の山車の画像掲載については、本稿の意味をご理解いただいた四日市商店連合会事務局松本綾氏からご高配をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げたい。

（かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査員・こいけ・ひろし＝同調査課長）

注　土人形の呼称については、近世京都の土人形が必ずしも伏見で製作されたとは限らないとする一貫した考えから、加藤は「京都土人形」と記述する。一方、基本的には「伏見人形」とする小池の考えを堅持し、各々の文中の記載は、あえて、統一していない。表題については、一般的な呼称である「伏見人形」とした。

参考文献

大倉集古館2010『開窯300年マイセン西洋磁器の誕生』

加藤雄太2013「藤谷家跡から出土した土人形及び土製品について：再整理」『同志社大学歴史資料館館報』16　同志社大学歴史資料館　pp.32-53

加藤雄太2016「近世京都の土人形―同志社構内出土資料を中心に―」『江戸遺跡研究』第３号　江戸遺跡研究会　pp.169-192

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2021『平安京跡（左京一条三坊三町）発掘調査報告』京都府遺跡調査報告集　第182冊

同志社埋蔵文化財委員会1994『京の公家屋敷と武家屋敷―同志社女子中・高校静和館地点、校友会新島会館別館地点の発掘調査―』同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ

田中伸也編1974『可笑記大成』笠間書院

俵有作編1978『日本の土人形』文化出版局

令和２年度発掘調査略報

１．下水主遺跡第12次

所 在 地　城陽市水主大将軍・倉貝、寺田金尾

調査期間　令和３年４月26日～令和３年９月21日

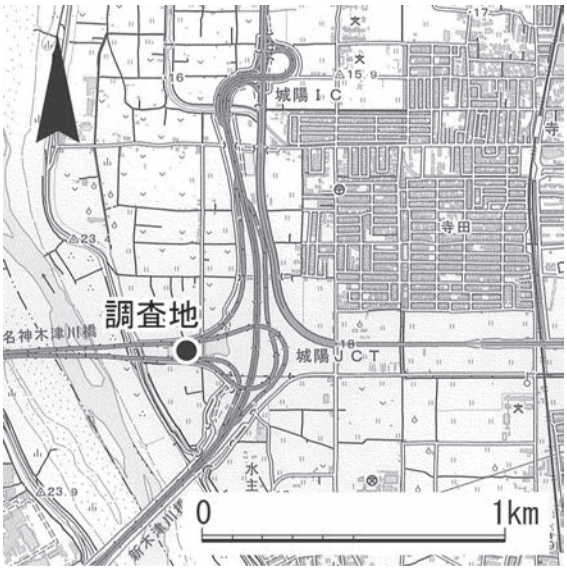
調査面積　650㎡

はじめに　新名神高速道路建設に伴う発掘調査である。調査地は木津川右岸堤防のすぐ東に隣接した場所にある。下水主遺跡での一連の発掘調査ではＦ地区とされている部分であり、これまで弥生時代の竪穴建物跡や中世の島畑が検出されている。本年度は、昨年度（第11次）に引き続いて、高速道路本線橋脚部分の発掘調査を４か所（F19～22区）で実施した。

調査概要　Ｆ19区　第11次調査では、北隣のＦ15区において古墳時代の流路ＳＤ02を検出していたが、基盤層面を精査したところ調査区の北東隅においてその続きを検出した。また調査区北東半分の広い範囲が30cm程度落ち込んでおり、埋土からは瓦器片が出土した。正方位をとらないものの、島畑の可能性がある。

Ｆ20区　基盤層面では調査区の中央において、北隣19～の第11次Ｆ13区から続く飛鳥時代の南北溝（ＳＤ02）、調査区の北東隅において古墳時代の南北流路（ＳＤ03）の続きを検出した。調査区西端では、島畑である基盤層の高まりを確認した。Ｆ13区では基盤層下において、弥生以前の東西流路の北肩を検出した。本調査区でも基盤層下の調査を実施したが流路は検出されなかったため、調査区間に南肩が存在するものと考えられる。

Ｆ21区　中世の遺構面において溝１条、ピット数基を検出した。基盤層面では調査区の南西端で11次Ｆ18区から続く島畑を検出したのみである。基盤層下でも調査を行い、弥生時代以前の氾濫の状況と流路を検出した。



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）

Ｆ22区　最も木津川寄りの調査区で、第４次調査Ｆ11区とＦ12区の間に位置する。検出面である基盤層の高さがＦ11・12区よりもかなり低く、島畑間の低位部に該当するものと考えられる。調査区の東端では中世の流路（ＳＤ01）と弥生時代の流路（ＳＤ02）が重複する状況を検出した。また調査区南辺では島畑を確認した。

まとめ　今回の調査では、基盤層面において弥生～飛鳥の流路、中世の島畑を検出した。特にＦ22区では、木津川に極めて近い場所で中世の島畑が作られていることが判明した。

（加藤雅士）

2．金生寺遺跡第９次

所 在 地　亀岡市曽我部町中中小路

調査期間　令和３年６月17日～令和３年９月14日

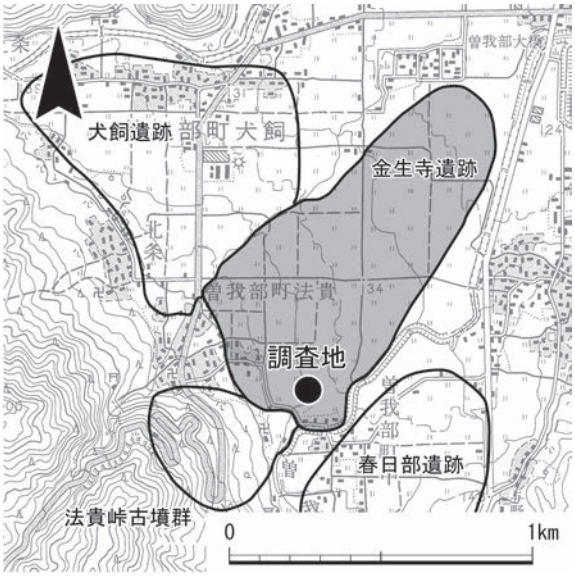
調査面積　310㎡

はじめに　金生寺遺跡は、亀岡盆地南部の曽我谷川等によって形成された扇状地上に立地する。近年、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴う発掘調査が行われており、古墳時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を確認されている。周辺には多くの遺跡が分布しており、古墳時代後期の群集墳である法貴峠古墳群や、中世の方形居館等が調査された犬飼遺跡、古墳時代の竪穴建物や平安時代末期の掘立柱建物等が確認された春日部遺跡などの調査成果が明らかになった。今回は金生寺遺跡の南端付近で調査を行った。

調査概要　調査地は、西側の丘陵と東側の曽我谷川の間に位置する断崖地形の縁辺部に位置する。標高137.5m付近にて調査を行い、東の曽我谷川に向かって傾斜する谷地形を部分的に２か所確認した。谷地形１は曽我谷川により形成された谷地形であり、最上部の谷頭部に相当する。出土遺物には、古墳時代前期から後期の土師器・須恵器等があり、多くが細片であるが完形に近いものも少量ある。磨滅がほとんど認められないことから、近隣から流入したものと考えられる。もう一つの谷地形２は谷地形１の南側に位置する。古墳時代から古代の遺物が出土しており、谷地形１よりも新しい谷と考えられる。また、調査地北側には丘陵部からの土石流堆積が分布する。同様のものは、５次調査や隣接する法貴峠古墳群２次調査でも確認しており、扇状地内に土石流が散在して分布する状況が認められる。

まとめ　今回の調査では、明確な遺構は検出できなかったものの、谷地形埋土からの出土遺物により、近隣に古墳時代の集落等が存在する可能性が明らかになった。曽我部町域を取り囲む丘陵部には、現状で15の古墳群からなる総数約250基を超える古墳・古墳状隆起が確認されている。墓域以外では、春日部遺跡・犬飼遺跡の竪穴建物・溝状遺構・流路、金生寺遺跡の水利関連遺構等が検出されており、亀岡盆地南部の古墳時代の動態を検討する上での重要な成果が蓄積されている。

（荒木瀬奈）



調査地位置図（国土地理院　1/25,000 法貴）

3.長岡京跡（右京第1233・1241次）・開田遺跡ほか

所 在 地　長岡京市神足地内

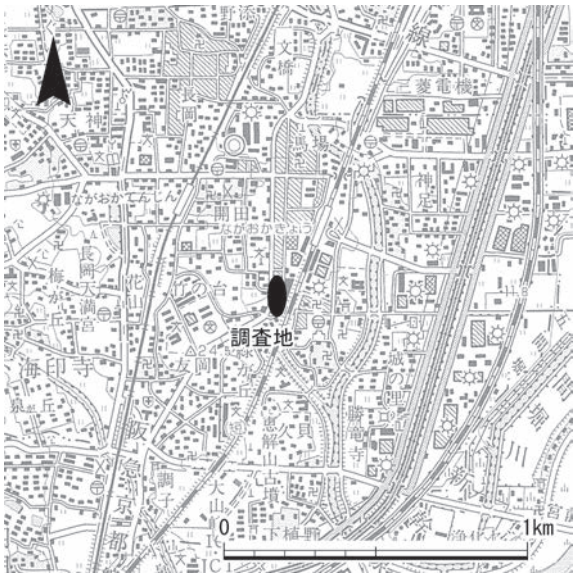
調査期間　令和２年12月14日～令和３年２月26日、令和３年４月12日～令和３年９月30日

調査面積　1233次：880㎡　1241次：1200㎡

はじめに　本調査は、令和２・３年度に御陵山崎線無電柱化推進補助（街路）業務委託に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京跡右京七条一坊十五・十六町付近に位置しており、過去の調査では右京1233次１区の北側で条坊側溝や宅地の区画溝が、右京1233次２区の北側で柱列・建物跡等が、右京1233次４区、右京1241次１区の西側では長岡京期の溝や河道等が検出されている。さらに右京1233次１・２区、右京1241次３区が開田遺跡、右京1233次３区は神足遺跡に含まれ、右京1233次４区、右京1241次１区は開田遺跡や中世勝竜寺城跡に隣接しており、周辺の調査では、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

調査概要　調査対象地を、右京1233次は北から１～４区、右京1241次は南から１～３区の計７か所にトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査地は犬川が形成する低位段丘の縁辺及び後背低地に立地している。右京1233次１・２区は削平が著しく、ピットを数基検出したにとどまった。右京1233次３区では、西国街道に伴う近世から近代の遺構が多数残されており、長岡京期の遺構としては、土坑１基と溝１条を検出した。土坑からは遺物がまとまって出土した。右京1233次４区は南に向かって旧耕作土及び造成土が厚く堆積しており、西側及び南側は遺構面が削平を受けていた。遺構の遺存状態はさほど良好ではなかったが、トレンチ北東部で時期不明の井戸を１基、トレンチ中央で縄文時代晩期の土器を伴う自然流路を検出した。



調査位置図（国土地理院　1/25,000　京都西南部）

右京1241次１・２区は、現在の水路や攪乱によって遺構が各所で削平されていたが、西一坊大路東側溝に相当する溝１条、その内側を区画する溝１条、さらにその東側で溝に方位を揃える桁行２間・梁行５間以上で西側に庇を持つ南北棟の掘立柱建物１棟及び土坑１基を検出した。

掘立柱建物は庇部が溝に近接することから、長岡京造営に関連する施設として先行して建てられ、大路の整備が行われた後、建物の庇部分を取り壊し、宅地を囲む築地塀が巡るよ

第２図　遺構配置図（１/1,000）

うになったと考えることができる。

なお、大路側溝からは土器とともに土馬や瓦片が、土坑からは墨書土器や円面硯を含む多くの土器が出土した。また、中・近世の土坑や井戸、柱穴等が多数検出し、遺物も多数出土した。

右京1241次３区では、右京1201次１区で確認されていた長岡京期の柱穴列がさらに北へ２間延びることを確認した。この柱穴列は、右京1241次１区で確認した掘立柱建物の東端を北へ延長したラインと概ね一致していることから、西側へ展開する建物跡であった可能性がある。さらに同地区では、長岡京期と考えられる土坑１基、竪穴建物１基を検出した。竪穴建物は、西側が調査区外のため、東半のみの検出であるが、周壁溝を持たず、焼土や炭・製塩土器が多く認められた。当該期の竪穴建物については、長岡京内では類例が数例あり、その多くが出土遺物等から工房の可能性があると考えられている。今回の調査で検出した竪穴建物についても遺物等を精査し、今後詳しく検討していきたい。このほか、近世以降の大型土坑１基、溝５条、柱穴多数を検出した。

まとめ　今回の調査では、西国街道関連と考えられる中近世の遺構に加え、長岡京期の遺構も多く確認できた。

右京1241次１・２区で長岡京の西一坊大路東側溝とその東側の宅地の遺構を検出したほか、右京1241次３区では、焼土や炭・製塩土器が集中する竪穴建物を検出した。

西国街道が機能していた近世の街並みに加え、わずか10年間の長岡京期における土地利用の変遷が追える貴重な資料を得ることができた。　（松井　忍）

4．菖蒲谷口遺跡第２次

所 在 地　京都府舞鶴市万願寺菖蒲谷

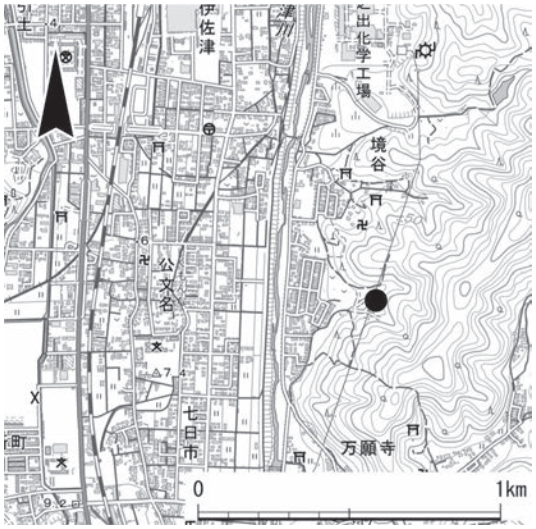
調査期間　令和３年５月11日～令和３年７月29日

調査面積　900㎡

はじめに　今回の発掘調査は、西舞鶴道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川工事事務所の依頼を受けて実施した。菖蒲谷口遺跡は、細川幽斎が築いた田辺城下町の南東側丘陵谷部に所在する、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の集落遺跡である。令和元年度の小規模発掘調査（第１次）の成果をもとに、遺構・遺物が確認された地点を中心に面的調査（第２次）を実施した。

調査概要　調査対象地は、最近の大規模造成で階段状に盛土されていたが、旧地形は東側の谷奥部から西方向にかけて緩やかに傾斜する。第１次調査では４基の柱穴からなる柱穴列１と柱穴を検出している。今回の第２次調査では、上下２面の遺構面を検出した。第１次調査で検出した柱穴列は、第１面（平安時代）に属していた。今回の調査では、新たに柱穴・溝・土坑を検出した。第２面は弥生～古墳時代遺構面である。掘立柱建物跡２棟（建物１・建物２）、土坑２基及び多数の柱穴を検出した。建物１は南北棟建物で、梁間２間×桁行３間（4.7m）規模とみられるが、梁間は１間（1.75m）分の検出しかできなかった。柱穴掘形は円形で、直径0.3m・深さ0.2mを測る。建物２は建物１の北西側でやや離れて検出した。梁間２間（4.2m）×桁行３間（5.5m）の規模を測る。柱穴の形状は建物１と変わらない。柱穴内から土師器破片が出土した。多数検出した柱穴の中には弥生時代後期の高杯片が出土したものがある。

出土遺物　弥生土器・土師器・須恵器が出土したが、遺物の総数は整理コンテナ１箱に余る。ほとんどの遺物が第２面上の遺物包含層からの出土であり、遺構に伴う遺物は極めて少量である。

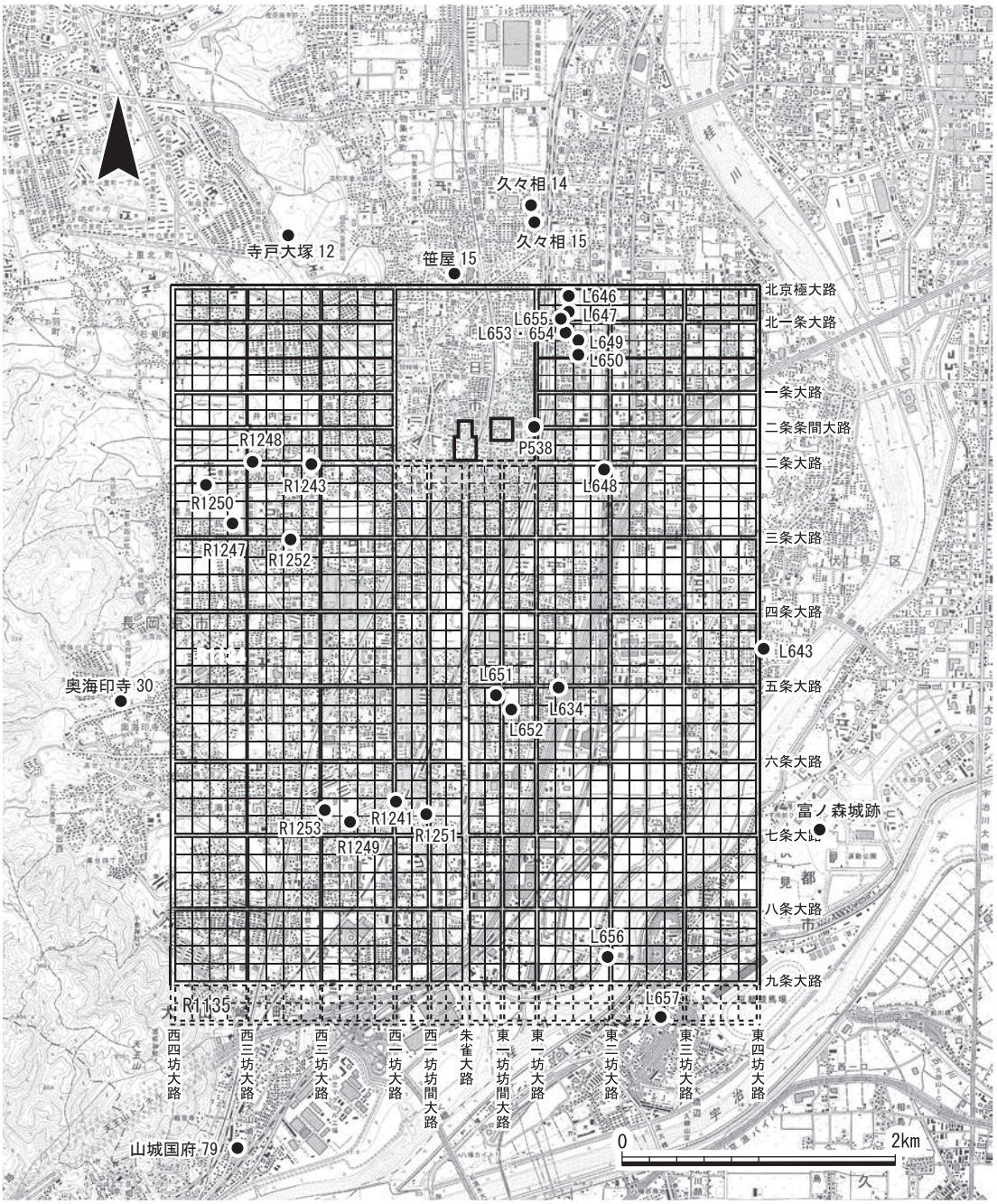


調査地位置図（国土地理院　1/25,000）

まとめ　今回の調査では、谷奥部で２棟の掘立柱建物跡を検出した。建物の柱穴及び建物集辺部で出土した土器から、建物跡の年代は古墳時代末～飛鳥時代と判断される。時期不明の柱穴が多数を占めるが、弥生時代後期の柱穴もある程度存在するものと考える。検出した建物跡は遺跡の東端部とみられ、中心地は調査地の西側扇状地付近と推測される。（竹原一彦）

長岡京調査だより・137

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和３年８月から11月までの例会では、宮域１件、左京域14件、右京域９件、京域外８件の合計32件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものについて略述する。



調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　宮第538次調査地（向日市鶏冠井町東井戸）は、東面南門の推定位置として調査し、平安時代の土坑を検出した宮537次調査の試掘調査を受けて面的に調査を実施した。東面南門推地周辺では遺構・包含層は存在せず、東側の段丘を降りた地点で東一坊大路西側溝を検出した。

左京　左京第634次調査（雲宮遺跡、長岡京市馬場六ノ坪）は小畑川が形成した扇状地内での大規模調査である。調査区の南半部に続いて、北半部が反転調査され、左京五条二坊五町の宅地内の掘立柱建物・柵列および祭祀土坑が検出された。建物の柱穴内からは根固めの木材、瓦、石などが出土した。５町の宅地は４分割されているようで、下層から弥生時代土坑も検出された。**左京第646次調査**（向日市森本町町田）では東二坊坊間小路東西両側溝を、**左京第647次調査**（向日市森本町上町田）では長岡京期の南庇を持つ掘立柱建物を検出した。**左京第648次調査**（向日市上植野町尻引）では三条大路と東二坊大路の交差点付近で調査され、三条大路北側溝、西二坊大路西側溝とも路面を横切って施工されていることが明らかになった。**左京第649次調査**（石田遺跡、向日市森本町東ノ口）では中世と弥生時代後期の溝・土坑が検出された。**左京第650次調査**（同前）では一条条間小路の南北両測溝が検出されたが、路面幅は８ｍであった。上層からは多量の瓦器と東播系の擂鉢を含む中世の土坑が検出されている。

右京　右京第1241次調査（開田遺跡、長岡京市神足２丁目）は、右京七条一坊十五町にあたり、西一坊大路に面する宅地である。西一坊大路東側溝、宅地内の築地雨落ち溝、西に庇の付く東西２間南北５間以上の掘立柱建物などを検出した。**右京第1243次調査**（今里遺跡・更ノ町遺跡、長岡京市今里更ノ町）では、長岡京期の掘立柱建物、古墳時代中・後期の溝などが検出された。**右京第1246次調査**（開田古墳群、長岡京市開田１丁目）では、長岡京期～平安時代前期の掘立柱建物２棟・柱穴列・溝などが検出された。**右京第1248次調査**（井ノ内遺跡、長岡京市井ノ内南内畑）では、古墳時代と平安時代の柱穴などを検出した。**右京第1250次調査**（井ノ内遺跡、長岡京市粟生川久保）では飛鳥時代の土器溜まりを確認した。

京域外　久々相遺跡第14次調査（向日市寺戸町瓜生）では、東一坊大路延長道路の西側溝を検出した。この成果は周辺調査の成果と合致するものである。長岡宮北辺官衙の北側、北京極から北へおよそ75ｍの地点で行なわれた**笹屋遺跡第16次調査**（向日市寺戸町向畑）では、長岡京期の丁寧な整地層を確認した。**山城国府第79次調査**（大山崎町字大山崎小字永福寺）では、西国街道の西測溝が検出され、測溝を埋めて宅地が広がる様相が明らかになった。奥海印寺第30次調査では、飛鳥時代の遺構が確認された。**富ノ森城跡**（京都市伏見区横大路六反畑）の調査では、鎌倉時代前半の掘形の明瞭な４条の区画溝などが検出された。

なお、史跡長岡宮跡で、史跡地内にある国登録有形文化財旧上田家住宅の整備と併せて行なわれた内裏内郭築地回廊の平面表示、内裏外郭築地の立体復元による整備事業が終了し、当連絡協議会において向日市教育委員会から説明があった。また、向日市埋蔵文化財センターから、平成12年から30年までの発掘調査を総括する報告書「五塚原古墳の研究」を刊行した旨報告があった。

（肥後弘幸）

現地公開

（令和３年８月～令和３年11月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現在、当調査研究センターでは、令和２年の年頭から全世界規模で猛威を振るった新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、現地説明会・現地公開については、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。この間にあたっても、令和３年８月20日～９月30日の間、府内において緊急事態措置が行われるなど異常な事態が続き、その後今に至るまで、やや新規感染者は減少傾向にあるが予断は許せない状況であることに変わりはない。そのため、この間の現地公開にあたっても、発掘調査地を限定するとともに、十分な感染予防を実施した上で実施することとした。それ以外についても、随時、記者発表を行い、関係資料については、当調査研究センターのホームページからダウンロードできるようにしている。

現地公開

上野遺跡　昨年度の報道で府内最古の旧石器時代遺跡が発見されたことで地元の関心も高い。今年度も引き続き発掘調査が実施されていることもあり、11月２日（火）に宇川小学校６年生を対象とした「上野遺跡の発掘調査を見学しよう！」と題して調査中の鍛冶炉や出土遺物の見学会を実施した。見学者は10名である。

また、翌11月３日（水）には、地元住民を対象に、調査中の鍛冶炉や出土遺物を対象に現地公開を実施した。参加者は30名であった。

上野遺跡現地公開

記者発表

木津川河床遺跡　江戸時代の絵図にも記されている天皇が石清水八幡宮を参拝する際に通ったとされる「御幸道」とみられる遺構が検出された。新型コロナウイルス感染予防のための緊急事態措置の期間でもあることから、記者発表のみ実施した。

木津川河床遺跡で見つかった御幸道

普及啓発事業
（令和３年８月～令和３年11月）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業への参加などの普及啓発活動を行っている。

現在、当調査研究センターでは、現地公開と同様、新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、埋蔵文化財セミナーをはじめとする普及啓発事業について、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。

なお、事業の開催に当たっては、十分な感染予防を実施した上で実施している。

また、今回報告の３事業はいずれも京都府教育委員会からの受託事業として実施した。

（１）埋蔵文化財セミナー

第147回埋蔵文化財セミナー　令和３年11月27日（土）　福知山市役所庁舎の隣、ハピネスふくちやまにおいて開催した。「京都最古の狩人たち　後期旧石器時代前半期の遺跡を中心に」と題し、平成30・令和元年度の調査で３万６千年前の石器がみつかった京丹後市上野遺跡、令和元～３年度の調査で同時期の石器が出土した福知山市稚児野遺跡に焦点をあて、当時のくらしの様子にせまることを目的に実施した。２遺跡の発見は、府南部ではおよそ２万年前の国府型ナイフ形石器が幾つかの遺跡で出土しているのに対し、府内北部では今まで旧石器時代の明確な遺物は見つかっておらず、京都府北部の歴史が一挙に遡る大きな発見であった。この成果に、当調査研究センターの３人の旧石器時代研究者が果敢に取り組み当時の生活の一端を解明しようとするものである。中川和哉課長補佐が後期旧石器時代研究の最新成果をもとに、時代の概説を行い、面

第147回埋蔵文化財セミナー座談会風景

第147回埋蔵文化財セミナーロビーでの石器展示

将道主任が上野遺跡の概要を、黒坪一樹副主査が稚児野遺跡の概要を述べ、最後に成果についての座談会を行った。普段聞きなれない旧石器時代の話に、聴衆は熱心に聞き入っており、アンケートでも好評を得た。また、当日は、２遺跡出土の旧石器を会場にて展示をし、さらに理解を深めていただくこととした。なお､当日のセミナー資料とは別に埋蔵文化財セミナー小冊子と題し、演題と同名のカラー小冊子を作成し配布した。

（２）展覧会等

発掘された京都の歴史2021　当調査研究センターでは毎年前年度の府内の発掘調査成果を一堂に報告する展覧会を向日市文化資料館、ふるさとミュージアム山城、ふるさとミュージアム丹後で巡回して実施している。昨年度はこの展覧会に代わって設立40周年記念展覧会を実施したため今回の対象は過去２年分となった。展示は、企画展示と速報展示から構成される。企画展示は「かつて京都に火山灰が降ったころ」と題して、京都府の旧石器時代を取り上げた。速報展示は、当調査研究センターの調査成果のほか、京都府教育委員会をはじめ与謝野町教育委員会､舞鶴市､京都市､（公財）京都市埋蔵文化財研究所、向日市教育委員会、（公財）向日市埋蔵文化財センター、（公財）長岡京市埋蔵文化財センター、八幡市教育委員会の発掘調査成果を取り上げた。両展示を合わせた展示数は、33遺跡351点である（付表参照）。会期は、向日市文化資料館で８月７日（土）～８月29日（日）、ふるさとミュージアム山城で９月４日（土）～９月15日（水）、ふるさとミュージアム丹後で９月22日（水）～10月10日（日）で計画していたが、新型コロナウイルスが蔓延したことを受けて京都府における緊急事態措置が８月20日から９月30日まで実施されたため、ふるさとミュージアム山城での展示は中止となり、ふるさとミュージアム丹後での展示は10月１日（金）からとなった。観覧者数は、向日市文化資料館で893人（開館日21日）、ふるさとミュージアム丹後で458人（開館日９日）の計1,351人であった。

向日市文化資料館１階観覧状況

向日市文化資料館２階観覧状況

ふるさとミュージアム丹後会場風景

付表　発掘された京都の歴史2021　出品目録

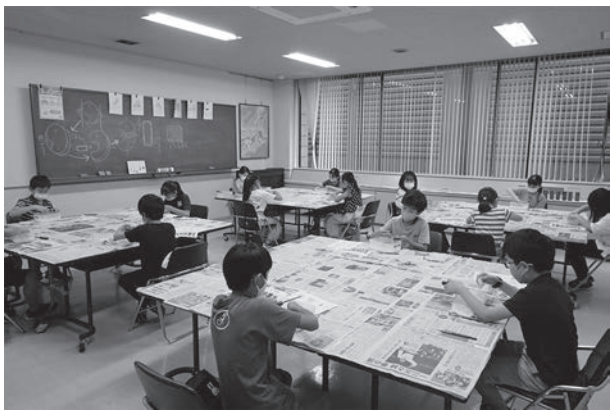
	展示品	点数	出土地	調査機関
	企画展示　かつて京都に火山灰が降ったころ			
1．三日市遺跡				
	火山灰	1		
2．上野遺跡				
	台形石器	5	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	鄰接縁石器	2		
	抉入石器	2		
	敲き石	1		
	石核	5		
	剥片石器（黒曜石）	2		
	剥片石器	6		
3．稚児野遺跡				
	ナイフ形石器	4	福知山市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	スクレーパー	2		
	石斧	3		
	ハンマー	1		
	横長剥片（フレーク）	2		
	黒曜石フレーク	4		
	チャートフレーク	1		
	チャート原石	1		
4．開田遺跡・十三遺跡				
	ナイフ形石器（開田遺跡）	1	長岡京市	長岡京市教育委員会
	ナイフ形石器（十三遺跡）	2		
	ナイフ形石器（十三遺跡）	3		京都府埋蔵文化財調査研究センター
5．美濃山遺跡				
	ナイフ形石器	2	八幡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	速報展示　発掘された京都の歴史2021			
1．新町遺跡				
	縄文土器深鉢	1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	勾玉	1		
	定型石斧	1		
	石鏃	6		
	土器片	3		
2．佐伯遺跡				
	縄文土器深鉢片（北白川C）	1	亀岡市	京都府教育委員会
	縄文土器深鉢片（条痕文）	1		京都府埋蔵文化財調査研究センター
	縄文土器浅鉢	1		
3．水主神社東遺跡				
	パネル展示		城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
4．烏丸綾小路遺跡				
	弥生土器壺（沈線文、櫛描文）	2	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
	搬入土器（壺片、鉢片）	1		
	土製円盤	1		
	石鏃（大小）	2		
	石包丁（未成品含む）	2		
	扁平片刃石斧	1		
	両刃石斧	2		
	叩き石	1		
	砥石	1		
	石錘	1		
	水差し形土器	1		
5．日吉ヶ丘遺跡				
	ヒスイ勾玉	1	与謝野町	与謝野町教育委員会
	凝灰岩玉作関連資料	4		
	石鏃	3		
	動物形土製品	3		
	土玉	1		
	石鏃	1		
	石錘	1		
	石斧	4		
	台石、砥石、磨石	3		
	不明石製品	1		
6．美濃山遺跡				
	弥生土器壺（大小）	2	八幡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	弥生土器甕	2		
	弥生土器鉢	1		
	弥生土器高杯	1		
	弥生土器器台	1		
7．小樋尻遺跡				
	流路跡パネル展示		城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
8．余部遺跡				
	曲柄又鍬	1	亀岡市	京都府教育委員会
	火切り臼	1		
	横槌	1		
	古式土師器甕	2		
9．金生寺遺跡				
	土師器壺	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	土師器甕	1		
	小型丸底壺	2		
	土師器高杯	3		
10．芝山古墳群				
	蛇行剣	1	城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	大刀	1		
	銅鏡	1		
	滑石製臼玉	6		
	須恵器杯蓋	2		
	須恵器提瓶	1		
11．法貴峠20号墳				
	金銅製耳環	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	玉類	12		
	須恵器杯	2		
	須恵器杯蓋	2		
	須恵器蓋	1		
	須恵器椀	1		
	須恵器高杯	2		
	須恵器高杯蓋	2		
12．宝菩提院廃寺				
	軒丸瓦	1	向日市	向日市埋蔵文化財センター
	軒平瓦	1		
	蓮華文鬼瓦	1		
	唐草文塼	1		
13．美濃山遺跡				
	須恵器杯	2	八幡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	須恵器杯蓋	2		
	須恵器高杯	1		
	土師器杯	1		
	土師器片口鍋	1		
	土馬	1		
	ひさご形土製品	1		
	不明土製品	1		
	鉄製鏃先	1		
	鉄製斧	1		
	鉄製鎌	2		
14．稲ノ木遺跡				
	軒丸瓦（奈良時代）	2	井手町	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	軒平瓦（奈良時代）	2		
	鬼瓦（奈良時代）	1		
	施釉垂木先瓦（奈良時代）	2		
	金銅製風招	1		
	軒丸瓦（平安時代）	2		
	軒平瓦（平安時代）	1		
15．長岡京右京第1180・1198次・伊賀寺遺跡				
	小型仿製鏡（古墳時代）	1	長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター
	須恵器杯身（古墳時代）	2		
	須恵器杯蓋（古墳時代）	1		
	土師器杯（飛鳥時代）	2		
	須恵器杯（飛鳥時代）	1		
	須恵器杯蓋（飛鳥時代）	1		
	鉄製鏃先（飛鳥時代）	1		
	軒丸瓦（長岡京期）	1		
	軒平瓦（長岡京期）	1		
	土師器壺（長岡京期）	2		
	須恵器薬壺蓋（長岡京期）	1		
16．史跡恭仁宮跡				
	パネル展示		木津川市	京都府教育委員会
17．長岡京跡左京第625次ほか				
	石冠	1	長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター
	墨書人面土器	6		
	墨書「一」のある須恵器杯	1		
	墨書「新明宮」のある須恵器鉢	1		
	四耳壺	1		
18．史跡西寺跡				
	パネル展示		京都市	京都市
19．今里遺跡				
	瓦器壺（佛華瓶）	1	八幡市	八幡市教育委員会
	瓦器椀	2		
	瓦質羽釜	1		
	三脚壺	1		
	青白磁合子	1		
	白磁碗	1		
	青磁椀	1		
20．丹波丸山古墳群				
	須恵器壺（蔵骨器）	1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	須恵器壺蓋（蔵骨器蓋）	1		
	菊花双鳥鏡	1		
21．満願寺跡				
	土師器皿（大小）	4	舞鶴市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	土師器皿（在地系）	3		
	瓦器小椀（六器）	1		
	土師器皿（六器）	1		
	瓦器椀	1		
	黒釉白堆線文壺	1		
	白磁壺	2		
	白磁香炉片	1		
	白磁水注把手	1		
	青磁椀	1		
22．犬飼遺跡				
	土師器小皿	2	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	瓦器椀	4		
	漆器椀	2		
	わらじ	1		
	参考：亀岡市金生寺遺跡土師器小皿	2		
	参考：亀岡市金生寺遺跡出土瓦器椀	2		
	参考：城陽市小樋尻遺跡出土瓦器小皿	2	城陽市	
	参考：城陽市小樋尻遺跡出土瓦器椀	2		
23．室町殿				
	パネル展示		京都市	京都市
24．平安京左京一条三坊三町跡				
	土師器皿（室町時代）	14	京都市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	国産陶器（大和・備前系）	6		
	国産陶器（瀬戸）	3		
	中国製青磁椀（室町時代）	1		
	中国製陶磁器（室町時代）	6		
	中国製磁器	5		
	菊御紋付染付椀	2		
	道八銘赤絵小鉢	1		
	仁清銘椀（底部）	1		
	周平銘小杯	1		
	蓮月焼	1		
	土人形	6		
	京都の町家で用いられた器	9		
	土層断面のタペストリー	1		
25．周山城跡				
	パネル展示		京都市	京都市
26．平安京左京一条三坊十町				
	美濃産志野製向付	1	京都市	京都市
	美濃産志野製茶碗	1		
	染付大皿	1		
	美濃産志野鉢	1		
	美濃産鼠志野鉢	1		
	美濃産青磁部灯明具	1		
	陶製水滴	1		
	染付茶碗	2		
	染付赤絵皿	1		
27．松尾寺跡				
	土師器甕	1	京都市	舞鶴市
	土師器小皿	2		
	元禄二朱判金	1		
	元禄豆板銀	1		
	寛永通宝	12		
28．音羽・五条坂窯跡				
	施釉陶器燈明皿	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所
	染付陶器椀	1		
	施釉陶器小椀	1		
	窯道具　ハマ	2		
	窯道具　輪チン	2		
	窯道具　匣鉢	2		
	窯道具　ツク	2		
	窯道具　棚板	1		
	耐火煉瓦　クレ	1		
	耐火煉瓦並型煉瓦	1		
	合　計	351		

京都府立図書館連携展示　昨年度から府立図書館２階ナレッジベースで出前展示を行っている。今年は、府立図書館新館20周年記念連携展示「発掘された京都の歴史－40年間の調査から－」と題し、９月29日（水）から10月27日（水）の間、ナレッジベース全室を利用して展示を行った。府立図書館のご協力により、当調査研究センターの調査で出土した名品と新館建設に伴う発掘調査状況の写真をパネル展示していただいた。当調査研究センターはセンター40年の発掘調査の歩みを紹介するとともに茶道具の名品として、寺町旧域（府立鴨沂高校）から出土した皆具一式（府暫定登録文化財）、亀山城跡（府立亀岡高校）などから出土した名工の手による清水焼及び府立図書館建設に伴う発掘調査で出土した岡崎遺跡の弥生土器・成勝寺跡の軒瓦を展示した。開館日25日間で、453人の観覧者を得た。

京都府立図書館連携展示の状況

歴彩館パネル展示「発掘された京都の歴史2021」の状況

歴彩館パネル展示　京都府立京都学・歴彩館からの提案を受けて、10月１日（金）から10月31日（日）までの間、府内の学際事業の一つとして、京都学ラウンジでパネル展示を行った。巡回展示中の「発掘された京都の歴史2021」展の展示内容を、当調査研究センターが20枚のパネルにデジタル作成のうえ、歴彩館で印刷し掲示いただいた。合わせて、井手町栢ノ木遺跡（井手寺塔跡）出土の軒丸瓦、軒平瓦、恭仁宮式文字瓦を展示した。会期中480人の観覧者を得た。


勾玉をつくろう！実施状況

（３）体験学習

夏休み考古学体験講座　勾玉をつくろう！　令和３年８月17日（火）から８月19日（木）までの３日間、午前・午後の２回にわたって、当調査研究センターにおいて、乙訓地域の小学校５・６年生を対象に実施した。昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止のため、１講座の募集人数を10名前後と規模を縮小した。参加者は74名である。参加希望者は、およそ２倍程度おられ、来年度はより多くの参加ができるような状況に改善されることが節に望まれる。　（肥後弘幸）

センターの動向
（令和３年８月～令和３年11月）

８　６　小山田宏一先生（前奈良大学教授）木津川河床遺跡（八幡市）現地指導
　７　「発掘された京都の歴史2021」展開始（於：向日市文化資料館　～29日、観覧者893名）
　17・18・19　「夏休み考古学体験講座　勾玉をつくろう！」（於：当センター　参加者72名）
　20～25　井上理事長、中尾・増田・上原・磯野・菱田・高橋・森下各理事「発掘された京都の歴史2021」展視察
　25　上野遺跡（京丹後市）現地調査開始
　　長岡京連絡協議会（於：当センター）
９　６　24号・府道小樋尻遺跡（城陽市）現地調査開始
　21　新名神下水主遺跡（城陽市）調査終了（４月26日～）
　22　長岡京連絡協議会（於：当センター）
　24　木津川河床遺跡（八幡市）記者発表
　29　京都府立図書館新館20周年記念連携展示「発掘された京都の歴史－40年間の調査から－」（於：京都府立図書館ナレッジベース～10月27日　入館者453名）
　30　長岡京跡（長岡京市）現地調査終了（４月27日～）
10　１　「発掘された京都の歴史2021」展開始（於：ふるさとミュージアム丹後　～10日　観覧者458名）
　　パネル展「発掘された京都の歴史2021」（於：京都学・歴彩館京都学ラウンジ　～31日　観覧者480名）
　７　増田理事木津川河床遺跡（八幡市）現地指導
　14　増田理事佐屋利遺跡・カンジョガキ遺跡（京丹後市）現地指導
　19　公益法人立入検査（於：当センター）
　23　ふるさとミュージアム山城文化財講演会講師派遣　「共存する２つの勢力－長池古墳・芝山古墳群と久津川古墳群－」小池調査課長
　27　長岡京連絡協議会（於：当センター）
11　２　上野遺跡（京丹後市）宇川小学校６年生現地見学（参加者10名）
　３　上野遺跡（京丹後市）地元向け現地公開（参加者30名）
　10　（公財）古代学協会鈴木忠司先生稚児野遺跡現地指導
　　兵庫県立大学松原典孝先生川向遺跡（京丹後市）出土石仏指導（於：当センター）
　11　外村遺跡（京丹後市）現地調査開始
　　森下理事幾坂古墳群・佐屋利遺跡（京丹後市）現地指導
　16　阿部事務局長常務理事稚児野遺跡（福知山市）、幾坂古墳群・外村遺跡・上野遺跡（京丹後市）現地視察
　19　木津川河床遺跡（八幡市）現地調査開始
　24　鶴尾遺跡（京丹後市）現地調査開始
　　長岡京連絡協議会（於：当センター）
　27　第147回埋蔵文化財セミナー「京都最古の狩人」（於：ハピネスふくちやま　参加者65名）
　29　菱田理事幾坂古墳群・上野遺跡（京丹後市）現地指導
　30　稚児野遺跡（福知山市）報道発表（現地説明会　12月４日）

編集後記

過ごしやすい季節があわただしく過ぎ去り、北部での調査に雪の心配をする季節が訪れました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第141号が完成しましたので、お届けします。

本号では、４月に現地公開を実施し反響を得ました栢ノ木遺跡で新たに発見された井手寺塔跡の調査成果の速報をお届けします。また、２編の研究ノート、若手調査員による１編とベテランと若手による合作の１編を掲載しました。ご一読いただきますようお願いします。

新型コロナウイルスの感染禍は、新たなオミクロン株が世界で大流行しており、予断は許さない状況です。来年こそは、現地説明会や講演会が普通にできる日常が戻ってくることを願うばかりです。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

（編集担当　肥後弘幸）

京都府埋蔵文化財情報 第141号

令和３年12月27日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER